

深江地区ほ場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告・II

木舟の森遺跡

—福岡県糸島郡二丈町所在・平安時代末期 館跡の調査—

二丈町文化財調査報告書

第 12 集



1995

二丈町教育委員会

深江地区ほ場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告・Ⅱ

木舟の森遺跡

—福岡県糸島郡二丈町所在・平安時代末期 館跡の調査—

二丈町文化財調査報告書

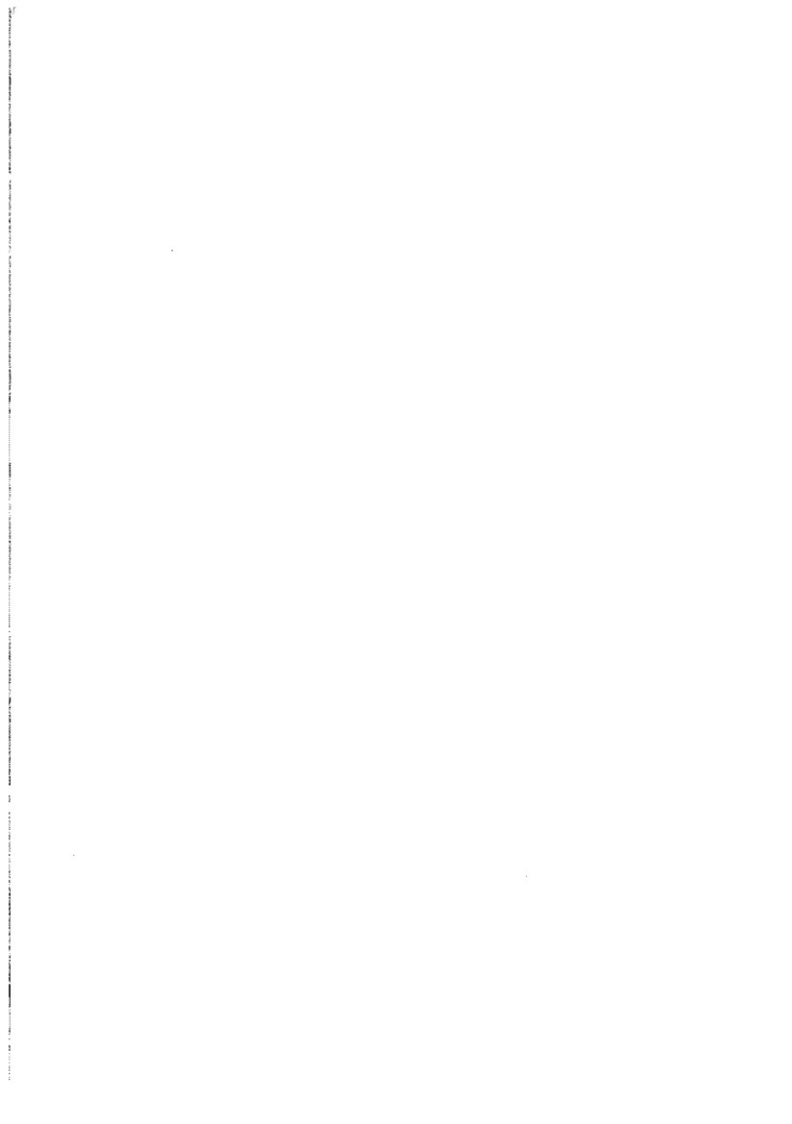
第 12 集

1995

二丈町教育委員会

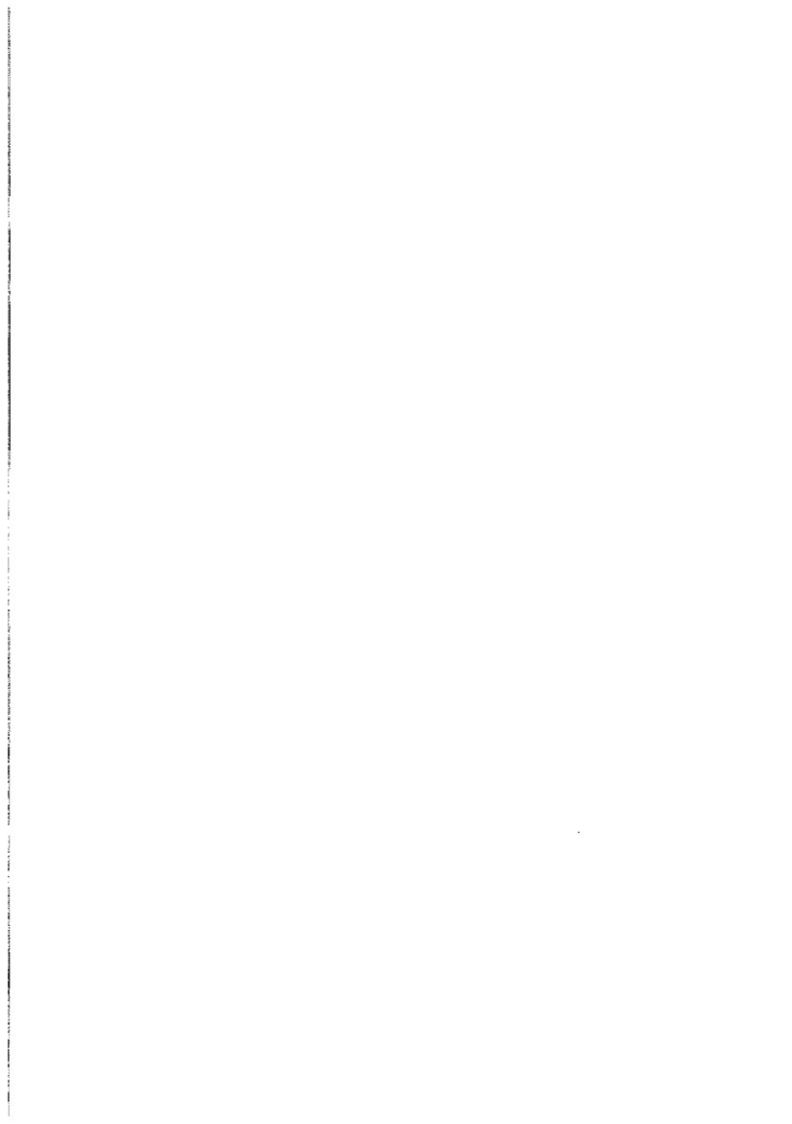


S D-06出土唐系青磁碗





S D—66出土龍泉系青磁碗



序

この報告書は、現在も継続して進行中であります深江地区のは場整備事業に関連して、平成4年度に発掘調査された木舟の森遺跡の調査記録とその成果をまとめたものであります。本書が考古学研究の一資料となり、文化財保護と活用に広く利用される事を願います。

平成7年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 吉村昌幸

例 言

1. 本書は深江地区県営ほ場整備事業に伴い発掘調査を実施した、二丈町大字深江字木舟に所在する木舟の森遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は二丈町教育委員会が国庫及び県費補助を受け実施した。
3. 本書に使用した遺構実測図の作成は、古川秀幸、村上 敦が行なった。
4. 本書に使用した遺物実測図の作成は村上が行なった。
5. 本書に使用した実測図の製図は、大島智美、浪口雅弘、村上が行なった。
6. 本書に使用した写真のうち、巻頭図版は「(株)阿部スタジオ」小森義昭氏に、空中写真は「(株)スカイ・サーベイ」森 馨氏に委託し、調査風景は「糸島新聞社」上原康弘氏の提供を受け、その他は村上が撮影した。
7. 本書に使用した拓本の作成は、別府大学学生、宮崎亮一が行った。
8. 本書で使用する方位は全て座標北である。
9. 題字は庄島蒼志充氏にお願いした。
10. 本書の執筆、編集は村上が行なった。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 遺跡の位置と環境	3
II. 発掘調査の記録	6
1. 調査の経過	6
2. 検出遺構	8
1) 溝状遺構	8
2) 掘立柱建物跡	12
3) 井戸	14
4) 土葬墓	14
5) 埋め廻遺構	16
6) その他の遺構	16
7) 植樹坑	16
3. 出土遺物	18
1) 土師器	18
2) 瓦器	30
3) 白磁	35
4) 青磁	38
5) 合子	40
6) 陶器	40
7) 墨書土器	40
8) 土製品	42
9) 石製品	43
10) 漆器	46
11) 現代の遺物	46
III. まとめ	47
1. 遺構の時期	47
2. 遺構の性格	47
3. おわりに	48

挿図目次

第1図	二丈町位置図(縮尺1/200,000)	2
第2図	現在の「木舟の森」遠景	3
第3図	周辺主要遺跡分布図(縮尺1/25,000)	4
第4図	遺跡周辺地形図(縮尺1/2,500)	5

第5図	遺構配置図(縮尺1/600)	7
第6図	S D-01実測図(縮尺1/400)・土層観察図(縮尺1/40)	9
第7図	S D-02~06実測図(縮尺1/400)・土層観察図(縮尺1/40)	11
第8図	S B-01実測図(縮尺1/80)	12
第9図	S B-02実測図(縮尺1/80)	13
第10図	S E-01実測図(縮尺1/40)	14
第11図	S K-01, 02実測図(縮尺1/20)	15
第12図	S X-01実測図(縮尺1/20)	16
第13図	S X-02~04実測図(縮尺1/30)	17
第14図	S D-01出土土師器実測図(縮尺1/3)	19
第15図	S D-05出土土師器実測図・1(縮尺1/3)	20
第16図	S D-05出土土師器実測図・2(縮尺1/3)	21
第17図	S D-05出土土師器実測図・3(縮尺1/3)	22
第18図	S D-06出土土師器実測図・1(縮尺1/3)	24
第19図	S D-06出土土師器実測図・2(縮尺1/3)	25
第20図	S D-06出土土師器実測図・3(縮尺1/3)	26
第21図	S D-01出土瓦器実測図(縮尺1/3)	30
第22図	S D-03出土瓦器実測図(縮尺1/3)	30
第23図	S D-05出土瓦器実測図(縮尺1/3)	32
第24図	S D-06出土瓦器実測図(縮尺1/3)	34
第25図	S K-02出土瓦器実測図(縮尺1/3)	34
第26図	S D-01, 05, 06出土白磁実測図(縮尺1/3)	37
第27図	S D-06出土青磁実測図(縮尺1/3)	39
第28図	合子実測図(縮尺1/3)	40
第29図	墨書土器実測図(縮尺1/3)	40
第30図	陶器実測図(縮尺1/3)	41
第31図	土製品実測図(縮尺1/3)	42
第32図	滑石製品実測図・1(縮尺1/3)	43
第33図	滑石製品実測図・2(縮尺1/3)	44
第34図	砥石実測図(縮尺1/3)	45
第35図	S D-05出土漆器	46
第36図	現代の遺物	46
第37図	遺跡周辺における当該期の海岸線想定図(縮尺1/25,000)	48

表 目 次

表1	土師器計測表	26
表2	小皿の計測平均値と底部の切離し方法	47
別表	遺物/整理番号対照表	

図 版 目 次

巻頭図版1	S D-06出土龍泉窯系青磁碗		
“	2	“	
図版1	遺跡上空から唐津方面を望む(空中写真)	図版19	S D-05出土土師器・6
図版2	木舟の森遺跡全景(空中写真)		S D-06出土土師器・1
図版3	1. S D-03, 05切り合い部分(空中写真)	図版20	S D-06出土土師器・2
	2. S D-05, 06切り合い部分(空中写真)	図版21	S D-06出土土師器・3
図版4	1. S D-01-a 土層断面(東から)	図版22	S D-06出土土師器・4
	2. S D-01-b 土層断面(北から)	図版23	S D-06出土土師器・5
	3. S D-01-d 土層断面(北から)	図版24	S D-06出土土師器・6
図版5	1. S D-03土層断面(東から)	図版25	S D-06出土土師器・7
	2. S D-04土層断面(東から)		S D-01出土瓦器碗
	3. S D-05北辺土層断面(東から)	図版26	S D-03出土瓦器碗
	4. S D-05西辺土層断面(南から)		S D-05出土瓦器碗・1
図版6	1. S D-06全景(東から)	図版27	S D-05出土瓦器碗・2
	2. S D-06土層断面(西から)	図版28	S D-05出土瓦器碗・3
図版7	1. S D-05遺物出土状況(東から)	図版29	S D-05出土瓦器碗・4
	2. S D-05漆器出土状況(西から)		S D-06出土瓦器碗・1
図版8	1. S B-01(東から)	図版30	S D-06出土瓦器碗・2
	2. S B-02(北から)		S K-02出土瓦器碗
図版9	1. S E-01検出状況(南から)	図版31	出土白磁・1
	2. S E-01(南から)	図版32	出土白磁・2
図版10	1. S K-01, 02検出状況(東から)	図版33	出土白磁・3
	2. S K-01完掘状況(北から)	図版34	出土白磁・4
図版11	1. S X-01(南から)	図版35	出土白磁・5
	2. S X-02(南から)	図版36	出土青磁・1
図版12	1. S X-03(東から)	図版37	出土青磁・2
	2. 発掘調査風景	図版38	出土青磁・3
図版13	S D-01出土土師器・1		出土合子
図版14	S D-01出土土師器・2	図版39	出土陶器
	S D-05出土土師器・1		出土土製品・1
図版15	S D-05出土土師器・2	図版40	出土土製品・2
図版16	S D-05出土土師器・3		出土石製品・1
図版17	S D-05出土土師器・4	図版41	出土石製品・2
図版18	S D-05出土土師器・5		

I. はじめに

1. 調査に至る経過

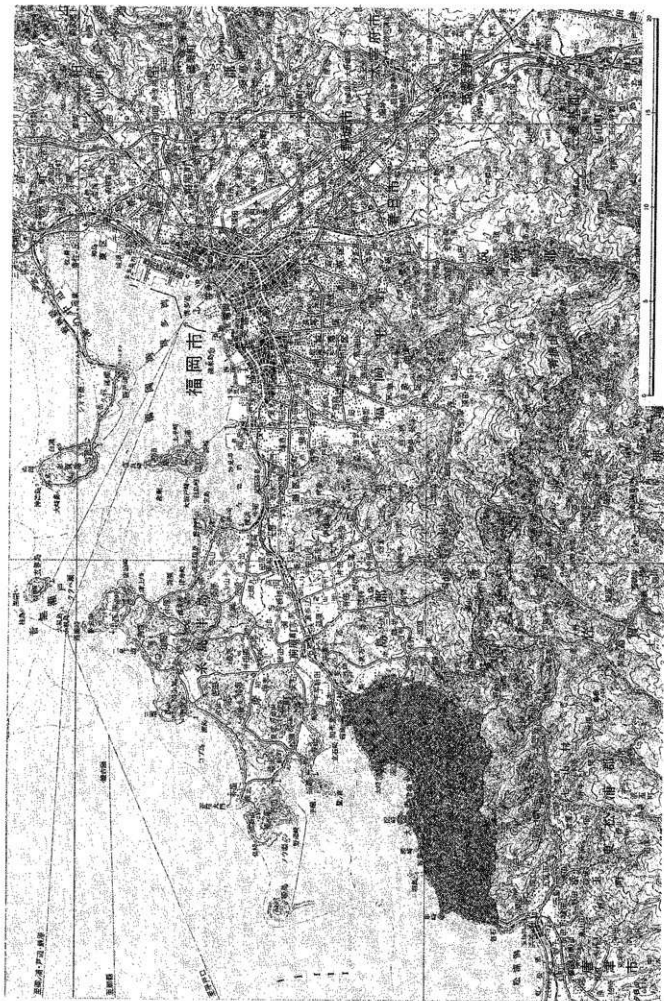
二丈町では、農業が基幹産業として位置づけられ、平成3年度より、二丈町の中心部である深江地区のは場整備事業を開始した。この「深江地区は場整備事業」は長辺300m、短辺115mの345aを標準区画とする大規模なもので、県内外の農業関係者からの注目を集めている。しかしながら、大規模ゆえに埋蔵文化財に対する影響も小さいものではなく、事前調査の対象になる面積は数十万㎡にも及び、平成7年3月現在までに約13,000㎡の遺跡がこの事業に関連して発掘調査されている。事業開始2年目にあたる平成4年度は、二丈町大字深江字大新聞周辺の約30万㎡が事業の実施区域とされ、工事着工と期を同じくして試掘調査を行った。その結果、通称「木舟の森」周辺において、溝状遺構、掘立柱建物跡などが検出され、福岡農林事務所、及び二丈町役場農政課土地改良係との協議の結果、記録保存の為の調査が行われることとなった。調査期間は、平成4年（1992）9月16日から平成5年1月15日までである。

2. 発掘調査の組織

調査主体	二丈町教育委員会	教育長	吉村昌幸
調査庶務		教育課 課長	庄島 正
		課長補佐	宮崎崑之（現・建設課長）
		社会教育係長	瀬戸利三
調査担当		文化財担当主事	村上 敦
発掘作業従事者	内田京子、内田マツヨ、内田美智子、草場信子、古賀久美子、 須古井節子、田中栄一、田中和子、田中ミヨ子、田中靖子、 波多江光子、原口志津子、古川智恵子、松村マサ子		
遺物整理作業従事者	木下文子、古藤紀子、大島智美、浪口雅弘		
バックフォー・オペレーター			
	榎力重機	山科英雄	
	榎田中組	田中正人	

なお、調査にあたっては、福岡県教育委員会 中間研志氏をはじめとする、多くの方々の指導を受けた。また、福岡農林事務所の関 保昌氏、工事施工業者の榎大庭組久保誠治氏にはただならぬご迷惑をおかけした。

末筆ながら記して感謝いたします。



第1图 二丈町位置图 (缩尺1/200,000)

3. 遺跡の位置と環境

二丈町の中心的水田地帯である一貴山・深江平野は、脊振山系の二丈岳より流出する一貴山川による沖積作用等によって形成されたものであり、この川によって大まかに、東側の一貴山地区、西側の深江地区に分けられる。延喜式によると、古代の深江には伝馬制による駅家が設置され、5頭の駅馬が配置されていたとされ、その所在地を確定することは当時の深江地域の状況を考える上で重要な意味をもつものであるが、未だ確認されていない。万葉集の頭書きによると、現在鎮徳石八幡宮が鎮座する子負ヶ原から約1kmの距離にあるとされており、その比定地については諸説があるが、最も有力とされている説は、現在の上深江周辺に所在していたとするものである。これは地元郷土史家の間では定説とされているものではあるが、「深江全体は昔、海であった」とする迷信的誤解がその根本的な根拠であり、再考の余地がある。近年の考古学的事象に基づけば、大型の掘立柱建物跡や鍛冶炉が検出され、越州窯系古磁などが出土した曲り田周辺遺跡のある石崎地区などが候補に挙げられるであろう。また、木舟の森遺跡等が存在する深江地区の東端地域も考慮に入れなければならないだろう。

また、一貴山・深江平野を眼下に望む唐原地区には、平家の落人伝説が残されている。太宰少弐でもあり、平重盛の養女を妻とする原田種直を頼って九州に落ちのびた重盛夫人と二人の子女、千姫、福姫が山深いこの地に潜伏し、数人の家来とともに自活の道を探っていた。しかしながら追手の捜索は厳しく、やがて二人の子女は殺され、重盛夫人は自害したというものである。唐原周辺には、夫人の墓、そして千姫、福姫の墓と言われる丸輪塔が残され、都見石と言われる大石は、夫人と子女が都を想いながら下界を眺めていた場所であると語り継がれている。この伝説が如何なる史実を伝えているかは定かではないが、唐原の麓には、鎌倉から解き放たれた種直が、重盛を弔う為に建てたと言われる龍園寺があり、この地の原田氏との関連性を窺わせる。

木舟の森遺跡は、深江地区の水田地帯のほぼ中央に位置する通称「木舟の森」周辺に所在する。木舟の森は、鬱蒼とした木立ちの中に、小さな祠が奉られる場所であるが、この地を神聖視する意識も根強く、中には立ち入る事さえも忌み嫌う者もある。「木舟の森」という表記は、「貴船の杜」から転化したものと思われ、古くから祈雨、止雨を司る神として信仰の対象となっていたと考えられる。かつては低砂丘の先端部分に位置していたものと思われ、微高地であるために現在は畑地として利用されているが、江戸初期に始まった開拓事業によってその周辺はかなり広大な範囲において埋め立て用土としての上取りによる削平が行われているようであり、元来の低地をさらに低くするものであったと思われる。現在の標高は2m前後となっている。その為、水害に弱い地盤を形成する結果となり、貴船神社の分社を奉り、水田の安泰を願ったものだと思われる。過去の大水による被害時には、あたり一面は海ようになり、木舟の森の木立ちだけが島の様に浮いて見えたとの事である。

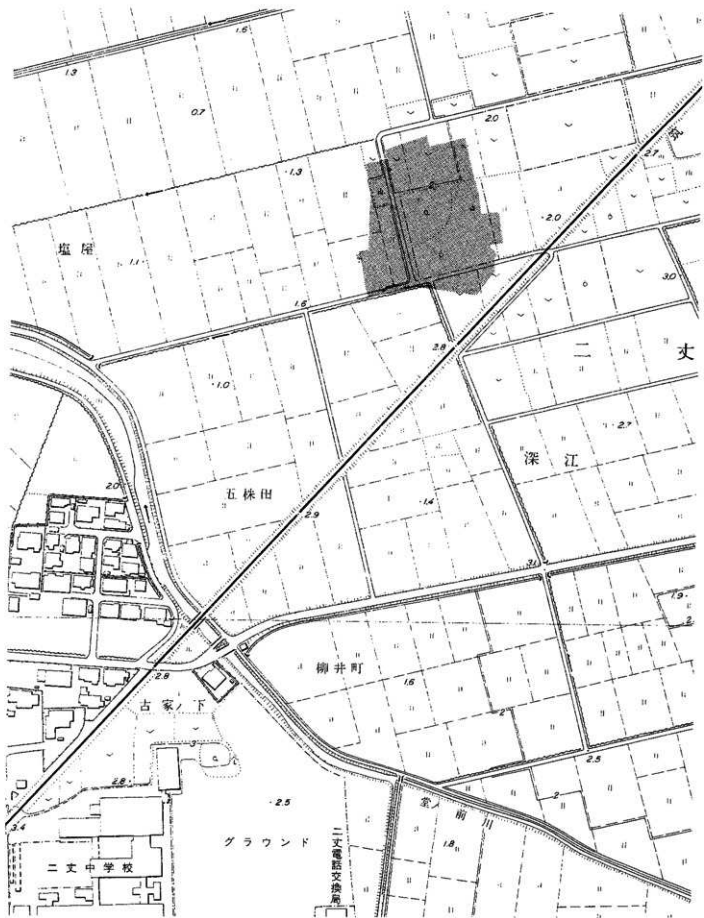


第2図 現在の「木舟の森」遺跡



第3図 馬辺主要遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

- | | | | |
|---------------|-------------|-------------|---------------|
| 1. 木舟の森遺跡 | 2. 木舟・三本松遺跡 | 3. 深江・井牟田遺跡 | 4. 上深江・小西遺跡 |
| 5. 徳正寺山古墳 | 6. 佐・夷藤寺跡 | 7. 曲り田遺跡 | 8. 曲り田馬辺遺跡 |
| 9. 石峰・矢風遺跡 | 10. 波呂・二塚古墳 | 11. 輪国寺 | 12. 平塚落人佐脱伝承地 |
| 13. 一貴山・鏡子塚古墳 | | | |



第4図 濃跡周辺地形図 (縮尺 1/2,500)

II. 発掘調査の記録

1. 調査の経過

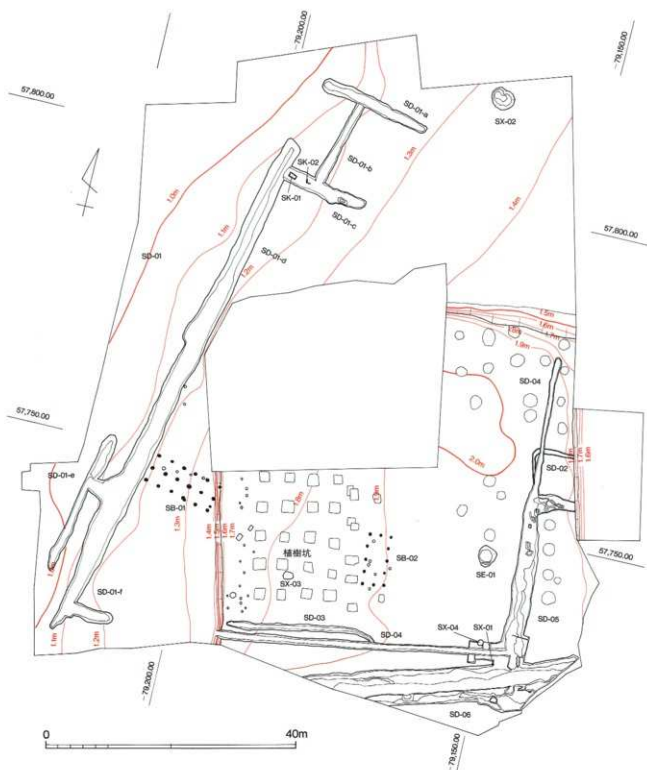
平成4年9月16日から開始された重機による表土剥ぎは10月3日に終了し、10月6日から作業員を導入しての本格的な調査を開始した。調査区の西部及び北部は表土剥ぎの段階で大方の遺構の配置が確認されていたため、攪乱の著しい南部から遺構の検出作業を行なった。その区域は調査以前には蜜柑畑として利用されており、その面積の大半が植樹坑による攪乱によって占められる結果となったが、掘立柱建物跡(SB-02)と、調査区の南端にほぼ東西方向に延びる2本の溝状遺構(SD-03, SD-04)を検出した。しかしそれらの溝状遺構は、ともに調査区外に向かって延びており、再度重機を導入し、調査範囲を拡大する必要性が生じた。

調査区東部も南部と同様に、植樹坑及び調査区外とされた木舟の森から延びる木根による攪乱が著しく、遺構検出は困難を極めたが、ここでは3本の溝状遺構と井戸(SE-01)などが検出された。最も大規模な溝状遺構(SD-05)は南北方向に延び、北方は段落ちによって途切れているものの、南方は調査区外に向かって延びており、南方部で検出された溝状遺構(SD-03, SD-04)と同一であるようにも思えた。また、その溝状遺構は、中央部付近から東部に向かって分岐しており、調査区外に向かって延びていた。

重機の導入による調査範囲の拡張は、県教育事務所からの指導もあり、予定を早め10月11日より開始し、調査区の北部、東部、南部の3ヶ所に行なった。その結果、調査区東部の拡張部分は1m近い段落ちになり遺構は完全に削平されており、南部の拡張部分は廃土置き場となっていたため十分な拡張は行なえなかったが、東西方向に平行して延びる2本の溝状遺構(SD-03, SD-04)が合流し、調査区東部の南北に延びる溝状遺構とほぼ直角のコーナーをもって繋がっている事が確認された。しかし予想外にも、南部の拡張部分の南端には、東西方向に延びる幅5m強の溝状遺構(SD-06)が検出され、拡張部分のさらに外側に向かって延びていたが、その延長部分は工事による影響も小さいものであると判断されたため、さらなる調査範囲の拡張は断念した。また、調査範囲内のSD-06を掘り進めるうちに、その北側の壁に東西方向の溝状遺構(SD-04)と繋がって途切れていたものと考えていた南北方向の溝状遺構(SD-05)の断面が現れていることが確認された。南北方向に延びる溝状遺構は、その中心部付近から南半分が幅2m強あるのに対し北半分は1m弱しかなく、以前から不自然さを感じていたが、様々な要因を考慮していくうちに、1本の溝状遺構と考えていた南北方向の溝状遺構は、実際は2本の時期の異なった溝状遺構(SD-04, SD-05)が複合して検出されたものである事が分かった。つまり、南北方向に延びる溝状遺構の南半分と、その部分から東方向に分岐するものと考えていた溝状遺構は同一のものであり(SD-05)、南方はSD-06によって切られる。また、北半分の幅の狭い部分は東西方向に向かって延びる溝状遺構(SD-04)と同一のものであり、SD-05を切っていた。つまり、ここでは少なくとも3時期に分かれる溝状遺構が切り合って存在する事になる。しかしながら調査時点においては、SD-04とSD-05の切り合い関係は確認出来ず、逆の新旧関係で捉えていたため、SD-04の、SD-05の埋土に掘られていた部分をとばしてしまう結果となった。

一方、調査区の西部及び北部では、最長85mを測る溝状遺構群(SD-01)と掘立柱建物跡

(SB-01) などが検出され、最終的に調査の終了は年を越しての1月15日となった。



第5図 遺構配置図 (縮尺1/600)

2. 検出遺構

1) 溝状遺構

SD-01

調査区の西部から北部にわたって位置する6条の溝状遺構群を同一遺構とみなし、SD-01と総称し、それぞれをSD-01-a～SD-01-fとする。12世紀初頭から中頃にかけての遺構であると考えられる。

SD-01-a

調査区の北部に位置する。主軸方向はN-78°-Wを示し、長さ18.0m、幅1.4～2.3m、深さ約0.4mを測る。中央部付近でSD-01-bと直角的に接するが、交差部分の底面のレベルはそれよりも約0.15m程低い。

SD-01-b

調査区の北部に位置し、SD-01-aとSD-01-cの中継的な溝である。主軸方向はN-14°-Eを示し、長さ14.6m、幅1.4～1.9m、深さ約0.3mを測る。SD-01-aとSD-01-cとの接点は共に直角的であり、SD-01-cとの接点部分の底面はフラットである。

SD-01-c

調査区の北部に位置し、中央部付近で北方向にSD-01-bと直角的に接し、西端はSD-04と直角的に接する。主軸方向はN-80°-Wを示し、長さ14.1m、幅1.3～1.5m、深さ0.2m～0.3mを測る。SD-01-dとの接点部分の底面のレベルはSD-01-dの方が低く、約0.4mの落差がある。遺構底面では土葬墓が検出された。

SD-01-d

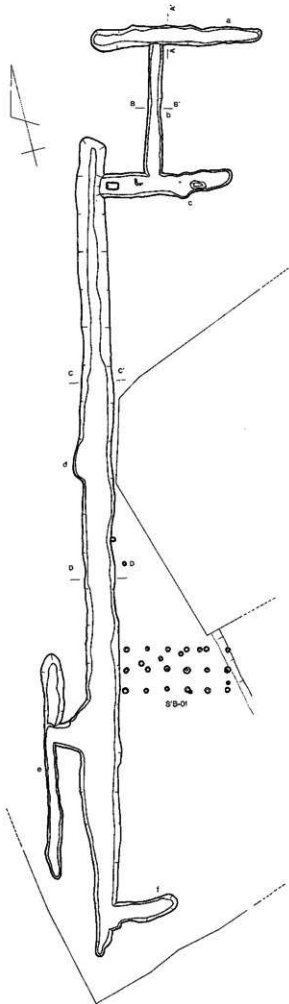
調査区の北部から西部にわたって位置する大規模な溝状遺構で、SD-01の中核的な遺構である。主軸方向はN-12°-Eを示し、長さ86.9m、幅3.1～3.9m、深さ0.5～0.7mを測る。北端部付近でSD-01-aと南端部付近でSD-01-fと、それぞれ東方向に直角的に接し、南部の最大幅部で分岐しSD-01-eと繋がる。全体的に下半部には黒色系の粘質土が堆積しており、遺物の出土はSB-01周辺に集中する。

SD-01-e

調査区の南部に位置し、SD-01-dと分岐点を経て繋がりが、それとほぼ平行関係にある。主軸方向はN-11°-Eを示し、長さ23.8m、幅1.2～2.3m、深さ0.3～0.4mを測る。

SD-01-f

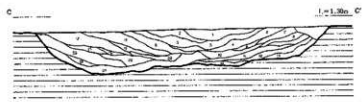
調査区の南隅部に位置し、SD-01-dの南端部と直角的に接する。主軸方向はN-80°-Wを



- sec. 1
- | | | |
|---------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 腐植质壤土 | 7. 暗棕壤土 | 13. 暗棕壤土 |
| 2. 腐植质壤土 | 8. 暗棕壤土 (G15199暗棕壤土) | 14. 暗棕壤土 |
| 3. 暗棕壤土 (22199暗棕壤土) | 9. 暗棕壤土 (G1918暗棕壤土) | 15. 暗棕壤土 |
| 4. 暗棕壤土 | 10. 暗棕壤土 | 16. 暗棕壤土 |
| 5. 暗棕壤土 | 11. 暗棕壤土 | 17. 暗棕壤土 |
| 6. 暗棕壤土 | 12. 暗棕壤土 (112199暗棕壤土) | 18. 暗棕壤土 (152199暗棕壤土) |



- sec. 2
- | | | |
|----------------|-----------------|-----------------|
| 1. 暗棕壤土 | 9. 暗棕壤土 | 17. 暗棕壤土 (暗棕壤土) |
| 2. 暗棕壤土 | 10. 暗棕壤土 (暗棕壤土) | 18. 暗棕壤土 (暗棕壤土) |
| 3. 暗棕壤土 | 11. 暗棕壤土 (暗棕壤土) | 19. 暗棕壤土 |
| 4. 暗棕壤土 | 12. 暗棕壤土 (暗棕壤土) | 20. 暗棕壤土 |
| 5. 暗棕壤土 | 13. 暗棕壤土 | 21. 暗棕壤土 (暗棕壤土) |
| 6. 暗棕壤土 | 14. 暗棕壤土 | 22. 暗棕壤土 |
| 7. 暗棕壤土 | 15. 暗棕壤土 | 23. 暗棕壤土 (暗棕壤土) |
| 8. 暗棕壤土 (暗棕壤土) | 16. 暗棕壤土 | 24. 暗棕壤土 |



- sec. 3
- | | | |
|---------------------|-----------------|-----------------|
| 1. 暗棕壤土 | 9. 暗棕壤土 | 17. 暗棕壤土 (暗棕壤土) |
| 2. 暗棕壤土 | 10. 暗棕壤土 (暗棕壤土) | 18. 暗棕壤土 |
| 3. 暗棕壤土 | 11. 暗棕壤土 | 19. 暗棕壤土 |
| 4. 暗棕壤土 (22199暗棕壤土) | 12. 暗棕壤土 | 20. 暗棕壤土 (暗棕壤土) |
| 5. 暗棕壤土 (22199暗棕壤土) | 13. 暗棕壤土 | 21. 暗棕壤土 |
| 6. 暗棕壤土 | 14. 暗棕壤土 | 22. 暗棕壤土 (暗棕壤土) |
| 8. 暗棕壤土 | 16. 暗棕壤土 | 24. 暗棕壤土 (暗棕壤土) |



- sec. 4
- | | | | |
|---------------------|-----------------|-----------------|----------------------|
| 1. 暗棕壤土 | 9. 暗棕壤土 | 17. 暗棕壤土 | 25. 暗棕壤土 |
| 2. 暗棕壤土 | 10. 暗棕壤土 | 18. 暗棕壤土 | 26. 暗棕壤土 |
| 3. 暗棕壤土 (22199暗棕壤土) | 11. 暗棕壤土 | 19. 暗棕壤土 | 27. 暗棕壤土 |
| 4. 暗棕壤土 (22199暗棕壤土) | 12. 暗棕壤土 | 20. 暗棕壤土 (暗棕壤土) | 28. 暗棕壤土 |
| 5. 暗棕壤土 (22199暗棕壤土) | 13. 暗棕壤土 (暗棕壤土) | 21. 暗棕壤土 | 29. 暗棕壤土 (22199暗棕壤土) |
| 6. 暗棕壤土 | 14. 暗棕壤土 (暗棕壤土) | 22. 暗棕壤土 | 30. 暗棕壤土 |
| 7. 暗棕壤土 | 15. 暗棕壤土 | 23. 暗棕壤土 | 31. 暗棕壤土 (22199暗棕壤土) |
| 8. 暗棕壤土 | 16. 暗棕壤土 | 24. 暗棕壤土 | 32. 暗棕壤土 |



第6图 SD-01实测图 (缩尺 1/400) 土壤剖面图 (缩尺 1/40)

示し、長さ6.8m、幅2.0～2.2m、深さ0.3mを測る。

SD-02

調査区の東部に位置する小規模な溝状遺構である。SD-04によって切られるが、遺物は小片のみであり時期は確定出来ない。ほぼ直角なコーナーをもつが、東端部は植樹坑によって攪乱を受け、南端部もSD-03、SD-05によって切られる。残存部分では東方向に約4.4m、南方向に約5.1m、深さ約0.1mを測る。

SD-03

調査区の東部から南部にわたって位置する溝状遺構である。東辺の主軸方向はN-4°-Wを示し、SD-05の西辺と一致する。南辺はS-80°-Wを示す。調査区東南隅部にコーナーをもち、北方向に39.8m、西方向に47.1mを測り、幅0.4～0.9m、深さ0.4m～0.5mを測る。北方向に延びる東辺の南半部はSD-05を切るが、調査現場では確認出来なかった。西方向に延びる南辺は段落ち部分で削平され消滅し、西部は中央部付近で分岐して二股に分かれる。12世紀中頃から後半にかけての遺構であると考えられる。

SD-04

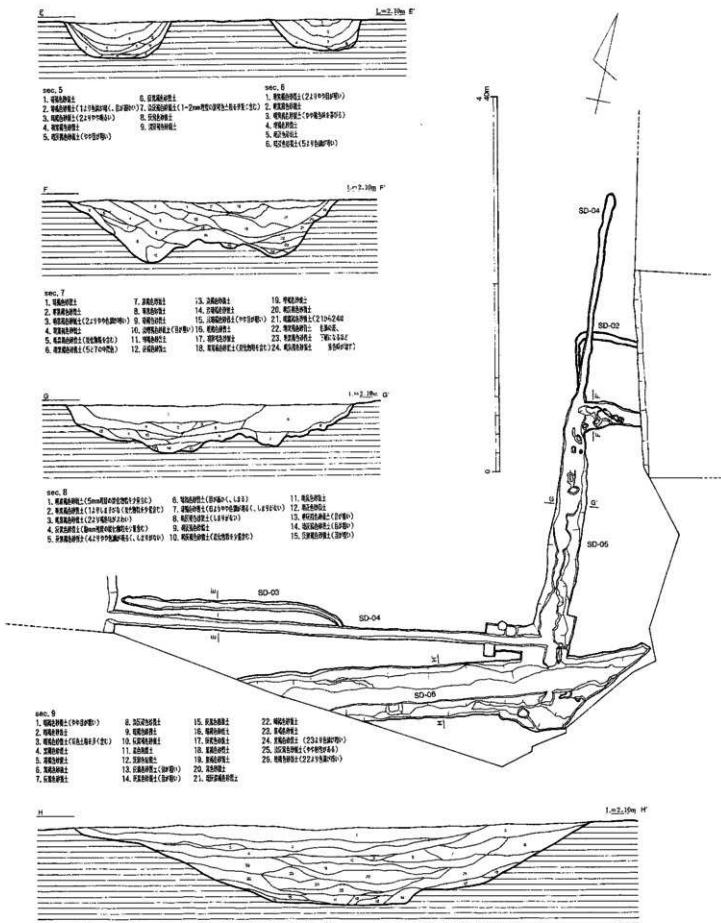
SD-03の南辺から分岐する溝状遺構である。長さ約21m、幅0.7～1.3m、深さ約0.3mを測り、主軸方向はS-80°-Wを示し、SD-03と平行関係にある。遺構の時期を示す遺物の出土はみられないが、SD-03と同時期のものであろう。

SD-05

調査区の東南部に位置する。西辺の主軸方向はN-4°-Wを示し、SD-03の東辺と一致する。幅1.5～3.3m、深さ0.2～0.7mを測る。方形区画を企図しているものと考えられるが、東方向に延びる北辺は段落ちによって削平され、南辺は調査区外に延び、調査区内においてはコ字状を呈する。西辺はSD-03東辺の南半部と重複し、西辺と南辺のコーナー部分をSD-06によって切られる。遺物は土師器、瓦器、白磁、滑石製品、鞆羽口などの出土がみられる。12世紀初頭から前半にかけての遺構であると考えられる。

SD-06

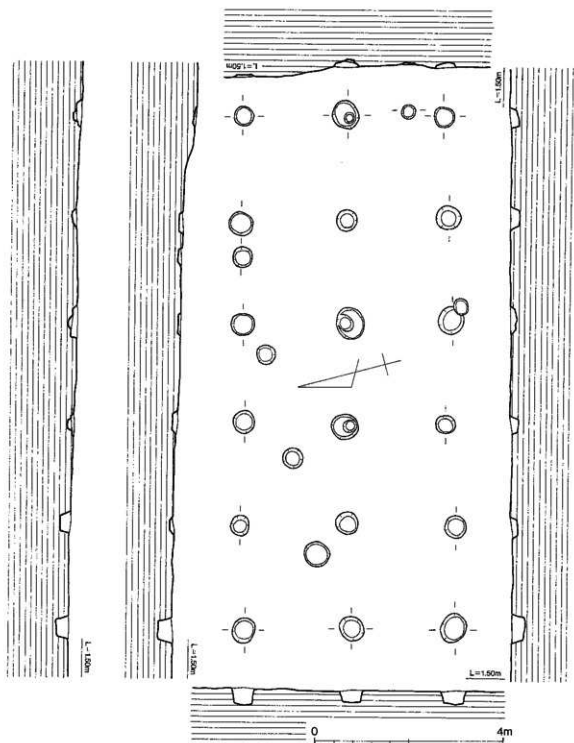
調査区の南端部に位置する大規模な溝状遺構である。幅5.5～5.7m、深さ0.8～1.0mを測り、主軸方向はS-73°-Wを示す。ほぼ東西方向に両端とも調査区外に延び、東方向ではSD-05を切る。調査区内においては約44mが検出されているのみであるが、全体的な規模は相当なものになると思われ、遺跡全体を取り囲んでいる可能性もある。出土遺物には、土師器、陶磁器、滑石製品などがあり、総数は確認出来ていないが、量的にはパンケース30箱分の出上がある。また遺物の出土地点は、主軸線よりもやや北側に片寄る傾向にあり、この遺構の北側に居住地区があったと考えて間違いないであろう。時期的には12世紀中頃から後半にかけての遺構であると考えられる。



第7圖 SD-02~06実測図 (縮尺1/400) 上層観察図 (1/40)

2) 掘立柱建物跡

調査区内において、2棟の掘立柱建物跡が検出されたが、調査区全体にわたって著しい削平、或いは攪乱を受けており、本来はこの他にも建造物が存在していたものと考えらるべきであろう。



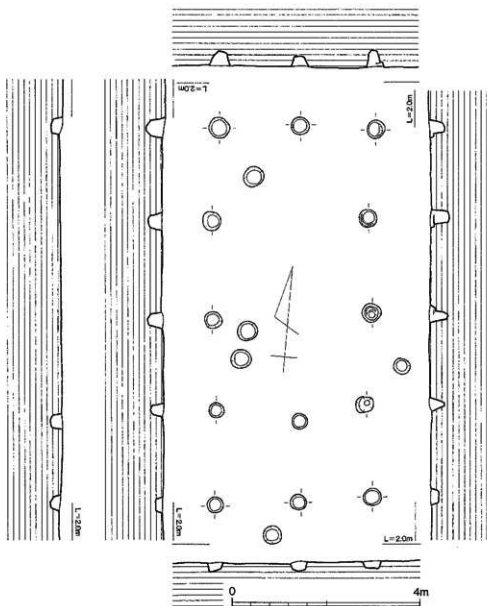
第8図 SB-01実測図(縮尺1/80)

SB-01

調査区の南西部に位置する、5×2間の掘立柱建物跡である。主軸方向はS-77°-Eを示し、東西約10.9m、南北4.4m、柱間は2.04~2.24mを測る。柱穴は円形を呈するが、削平により底の部分のみが検出されたものと思われる。西辺はSD-01に面しており主軸方向はほぼ直交している。出土遺物は細片のみであり時期的な併行関係は明確に出来ないが、SD-01と同時期に存在していたものと思われる。

SB-02

調査区の南部の中央付近に位置する4×2間の掘立柱建物跡である。主軸方向はN-4°-Eを示し、東西8.4m、南北8.0m、柱間は1.60~2.08mを測る。柱穴は径0.3m前後の円形を呈するが、SB-01と同様に削平を受けており、出土遺物は土師器の細片のみであり、時期は確定出来ない。

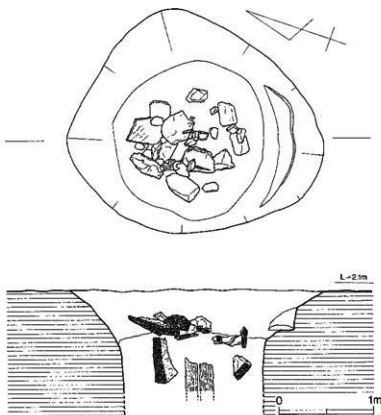


第9図 SB-02実測図 (縮尺1/80)

3) 井戸

SE-01

調査区の南東部に検出された井戸である。SD-05の西4mに位置し、平面形は径3.0~3.4mの不整形円形を呈する。開口部分は検出出来なかったが、下部構造から推定すると径約1.2m程度の円形の開口部をもっていたと思われる。掘方の開口部はすり鉢状に開く。石囲いをした内側に木組みの井戸枠があったと思われるが、廃棄の後に石材を抜き取ったらしく残されたものだけでは復元出来ない。下部の石材には切り石が使われるが、上部では自然石が使われている。湧水の為、完掘は行なえなかった。出土遺物は土師器、白磁器、青磁器、陶器等であり、12世紀後半代の遺構であると考えられる。



第10図 SE-01実測図(縮尺1/40)

4) 土葬墓

SD-01-cの底部分において、土葬墓と思われる2基の遺構が検出された。SD-01-cの主軸を意識して造られており、溝が本来の機能を失った後、且つ完全に埋没する以前に営まれたものだと考えられる。

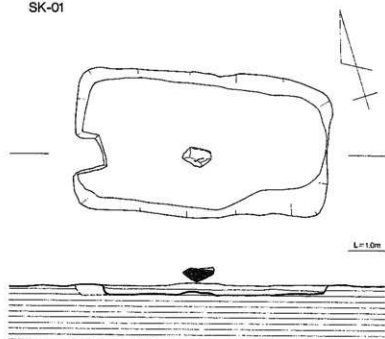
SK-01

SD-01-cの、SD-01-dとの合流地点から約1mの底部分から検出された土葬墓である。主軸方向はN-73°-Eを示し、SD-01-cの主軸方向N-80°-Eに近い。検出ミスによって大半を失ってしまったが、1.3×0.8mの長方形を呈する。副葬品等の出土遺物はないが、中央部付近に拳大の自然石が、底から約5cm浮いた状態で検出された。標石の一部が残されたものかも知れないが、被葬者の懷中に抱かれていたような印象を受ける。

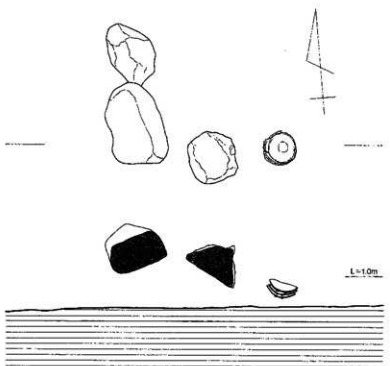
SK-02

SK-01の東南約2mに位置する。掘込みは完全に失われているが、底付近に極僅かではあるが木材の小片が検出されているので木棺墓である可能性もある。標石と思われる3個人頭大の石が残され、棺内に納められていたと思われる積み重ねられた3点の腕が供献される。

SK-01



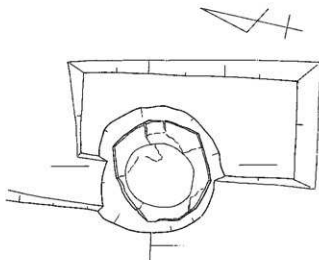
SK-02



第11图 SK-01、02実測図(縮尺1/20)

5) 埋め甕遺構 (SX-01)

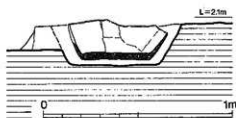
調査区東南部のSD-03南辺とSD-06の間で検出された埋め甕遺構である。底部分のみの検出であり、大半は削平によって失われている。掘り方は径約1mの不整形円形を呈する。



6) その他の遺構

SX-02

調査区の北東隅部で検出された土墳である。2.5×3.0mの不整形円形に隅丸方形の張り出し部をもつ。遺構内には拳大から人頭大の石や、杭状の木材が検出される。出土遺物は小片のみであり、時期的な判断は出来ない。



第12図 埋め甕遺構 (SX-01) 実測図 (縮尺1/20)

SX-03

調査区の南部で検出された土墳である。約1.2×1.7mの不整形を呈し、ヘラ切り底の土師器の小皿が1点出土する。

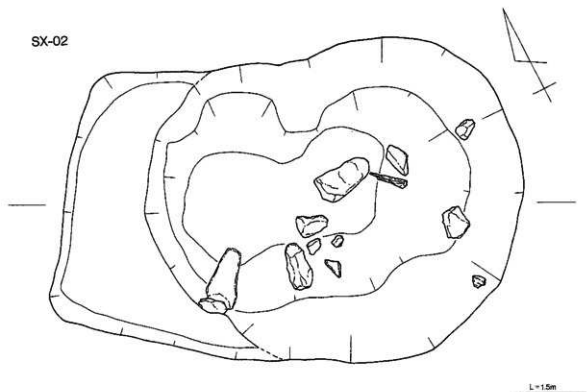
SX-04

調査区の南東部のSD-03南辺東端の北側で検出された土墳である。1.8m前後の不整形円形を呈し、深さは0.75mが残される。土墳墓である可能性もあり、遺構内では標石とも考えられる5個の拳大の石が検出された。出土遺物は土師器の小片のみであり時期の確定は出来ないが、12世紀代のものであると思われる。

7) 植樹坑

調査区の南部、及び南東部には多数の植樹坑が残されていた。いずれも昭和期のものであり、調査においては遺構としてではなく、攪乱として扱った。円形のもの、方形のものとの2種類があり、概ね等間隔に掘られている。方形のものは調査区南部に多く見られ、埋土は黒褐色土で、多数の木の根が巻き付いていた。以前は柑橘系の果樹園として用いられていた土地であり、それに伴う植樹坑であると考えられる。そのうちの一つから「NIPPON BEER KOSEN CO.LTD」と記されたビール瓶が出土した。日本ビールは現在のサッポロ・ビールの前身である。

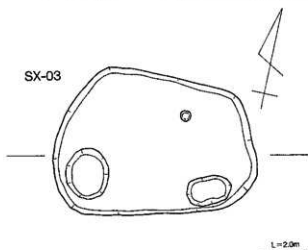
SX-02



L=15m



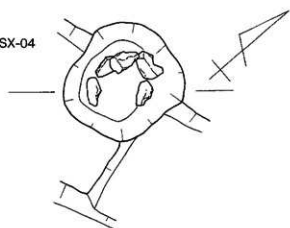
SX-03



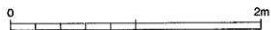
L=2.0m



SX-04



L=2.2m



第13图 SX02~04实测图 (缩尺1/30)

3. 出土遺物

出土遺物には土師器、瓦器等の土器類、青磁、白磁等の輸入陶磁器、石鍋及びそれを再加工した滑石製品、輪沓口、漆器などがあるが、包含層が削平を受けているため大部分が溝状遺構からの出土である。溝状遺構、特にSD-01、SD-05、SD-06からは夥しい数の遺物が出土したが、ここで図示したものはその一部である。

1) 土師器

溝状遺構の中からは多量の土師器が出土したが、器種のバラエティーは乏しく、小皿、高台付小皿、杯、高台付杯に限られ、その大半が小皿と杯である。

SD-01 出土土師器

小皿12点、杯類14点を図示した。図示したものは全てSB-01の近辺から出土したものである。底部の切離しは糸切りとヘラ切りが混在するが、ヘラ切りが主体を占める。小皿の83%、杯類の86%がヘラ切りである。

小皿 (1~12)

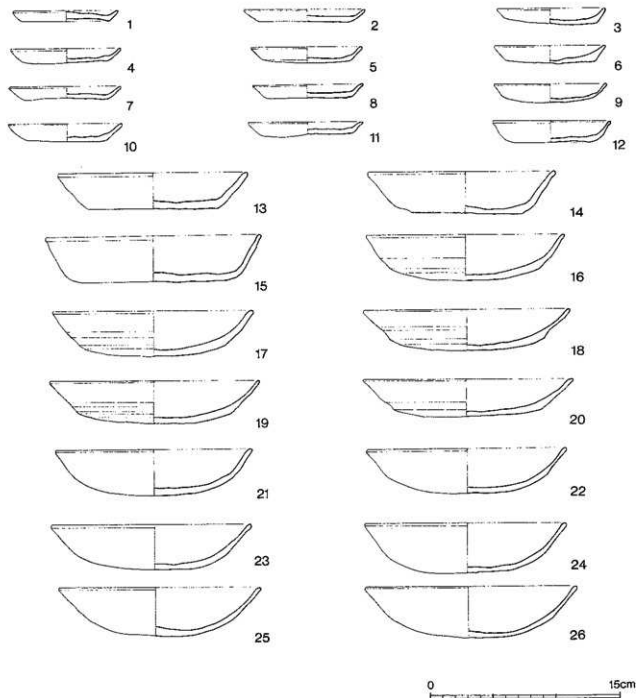
平均値は口径8.9cm、底径6.7cm、器高1.2cm。計測値は口径8.4~9.3cm、底径5.8~7.4cm、器高0.9~1.7cmである。底部の切離しは、1・2が糸切りのほかは全てヘラ切りである。殆どに底部の板目状圧痕と内面底部のナデがみられる。2の口径は最大値である9.7cmを測り、口径偏差値は74、偏平率は9%とやや偏平である。9は全体的に薄手であり、底部は丸底状を呈する。12の器高は最大値の1.7cmを測り、器高偏差値は68、偏平率は18%であり、杯に近い形体的バランスを呈する。

杯 (13~15)

平均値は口径15.8cm、底径10.2cm、器高3.3cm、計測値は口径15.0~17.2cm、底径8.8~11.3cm、器高2.9~3.6cmを測る。13・14の底部の切離しは糸切り、15はヘラ切りである。糸切りのものは、ヘラ切りのものと比較して一回り小さく、口径15.0~15.2cm、底径8.8~10.4cm、器高2.9~3.3cmを測る。15は口径17.2cm、底径11.3cm、器高3.6cmを測る。

丸底杯 (16~26)

平均値は口径16.4cm、器高3.6cm、計測値は口径15.6~16.9cm、器高3.0~4.1cmを測る。18、19、20は偏平率が20%以下と、丸底杯の中ではやや偏平の類である。16~20は体部に稜線があり、ヨコナデ痕が残される。口径15.7~16.7cm、器高3.0~3.7cmを測り、底部の切離しは全てヘラ切りであり、板目状圧痕が残る。21~26の体部は全体的に丸味を帯びており、調整痕は丁寧にナデ消されている。口径15.6~17.2cm、器高3.6~4.1cmを測る。底部の切離しは全てヘラ切りであり、21・24・26以外には板目状圧痕が残る。



第14図 SD-01出土土師器実測図（縮尺1/3）

SD-05 出土土師器

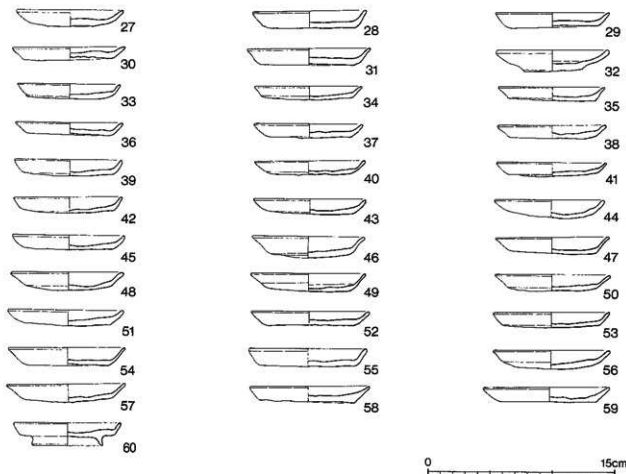
小皿33点、高台付小皿1点、杯類37点、の計71点を図示した。図面上で完形に復元可能なものは出来る限り図化したすが、総数はこの限りではない。底部の切離しは糸切りとへら切りが混在し、へら切りが主体を占め、小皿の82%、杯類の78%がへら切りである。

小皿 (27~59)

平均値は口径9.1cm、底径6.7cm、器高1.3cm、計測値は口径8.3~10.2cm、底径3.8~7.8cm、器高1.0~1.7cmを測る。底部の切離しは27~32が糸切り、33~59がヘラ切りである。その殆どに板目状圧痕が残され、内面のナデがみられる。27、32は口径に対して底径が小さい類いのもので、底径は口径の半分程度しかない。30の口径は9.1cmを測り、平均的な大きさであるが、器高が1.0cmと最小値であり、偏平率は11%と平均値を大きく下回っている。底部には板目状圧痕が明瞭に残る。44の底部は丸底状を呈し、体部と底部の境が不明瞭である。底部が丸底状を呈するものは、この他にも46、48、56、57があるが、44はやや異質である。46は外反する口縁部をもち、底部はやや丸底状を呈する。口径値は平均的なものであるが、器高値は最大であり、偏平率も最大の19%を示す。59の口径は10.2cmを測り、平均を一回り上回り口径偏差値は78である。

高台付小皿 (60)

口径8.6cm、高台径5.7cm、器高1.8cmを測る。体部の底部の切離しはヘラ切りであり、板目状圧痕が残される。



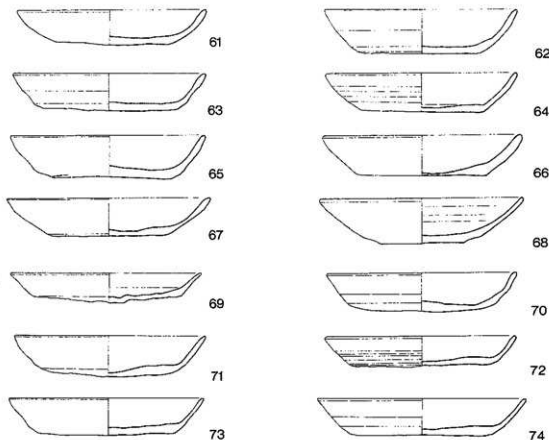
第15図 S D-05出土土師器実測図・1 (縮尺1/3)

杯 (61~74)

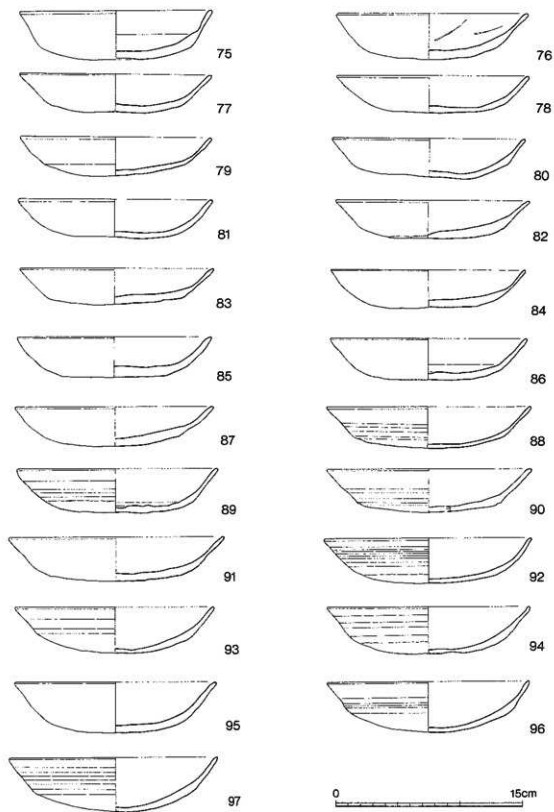
平均値は口径15.8cm、底径9.8cm、器高3.1cmである。計測値は口径14.9~16.6cm、底径6.6~11.5cm、器高2.4~3.6cmを測る。底部の切離しは61~68が糸切り、69~74がヘラ切りである。66は口径16.1cm、底径10.2cm、器高3.2cmを測り、体部の器壁はやや厚ぼったいが、底部中央付近は極端に薄くなっている。68は口径に対して底径の比率が小さく、体部は若干内湾しながら外側に開く。口径16.0cm、底径6.6cm、器高3.6cmを測り、底径は口径の40%である。69は口径15.1cm、底径11.4cm、器高2.5cmを測る。底部が大きく歪み、体部は偏平である。74の口径は16.6cmを測り、他と比して一回り大きく、口径偏差値は73を示す。

丸底杯 (75~97)

平均値は口径16.0cm、器高3.4cm。計測値は口径15.2~17.2cm、器高2.9~4.3cmを測る。底部の切離しは全てヘラ切りである。口径の平均値を境として大きく2つに分類できる。口径が平均値以下のものは75~87で、口径15.2~16.0cm、器高2.9~3.8cmを測る。底部は平底気味の丸底を呈するものが多数を占める。体部は丁寧に調整痕がナデ消され、75と76の内面にはコテ具による調整痕が残される。口径が平均値を上回るものは88~97で、口径16.1~17.2cm、器高3.2~4.3cmを測る。底部の形状は前者よりも丸底化が顕著である。87・91・95の体部は調整痕が丁寧にナデ消されているが、その他は調整痕が残される。



第16図 S D - 05出土土器実測図・2 (縮尺1/3)



第17图 SD-06出土土器实测图·3 (缩尺1/3)

SD-06出土土師器

小皿60点、杯34点、高台付杯1点、の計95点を図示した。出土総数はこの数倍以上にのぼる。底部の切離しは糸切りとヘラ切りが混在するが、ここでは糸切りが主体を占め、ヘラ切りのものは小皿の15%、杯類の20%である。しかし、ヘラ切りのものの殆どがSD-05を切った部分とその近辺から出土しており、SD-05の埋土に含まれていたものが混入した可能性も考えられ、遺構の時期を決定する上で重要な指標となるものであり慎重にならざるを得ない。そうした場合、ヘラ切りのものは小皿が1点のみとなり、ほぼ100%が糸切りのものとなる。

小皿 (98~157)

平均値は口径8.9cm、底径6.9cm、器高1.2cm。計測値は口径8.1~9.5cm、底径5.6~7.7cm、器高0.9~1.6cmを測る。底部の切離しは、98~148が糸切り、149~157がヘラ切りであるが、149~156はSD-05の埋土から混入した可能性がある。糸切りのものは、概ね底部の厚ぼったいものが多く、器高の半分、若しくはそれ以上を占めるものもある。106は口径8.4cm、底径6.3cm、器高1.5cmを測り、器壁は均等に厚く、口縁端部は丸味を帯びる。器高の口径に対する比率は最も大きく、偏平率は18%である。116は、口径8.7cm、底径5.6cm、器高1.4cmを測り、底径の口径に対する比率が最も小さく64%である。147は口径9.5cm、底径6.8cm、器高1.6cmを測り、器高が最も大きい。口径が最も大きいものは148で口径9.9cm、底径8.5cm、器高1.0cmを測り、偏平率は10%と最も偏平である。155、156の底部は丸底状を呈する。118、120、137は胎土中に極少量ではあるが赤色粒を含む。この赤色粒は弥生時代中期の甕棺にもみられるものである。

杯 (158~187)

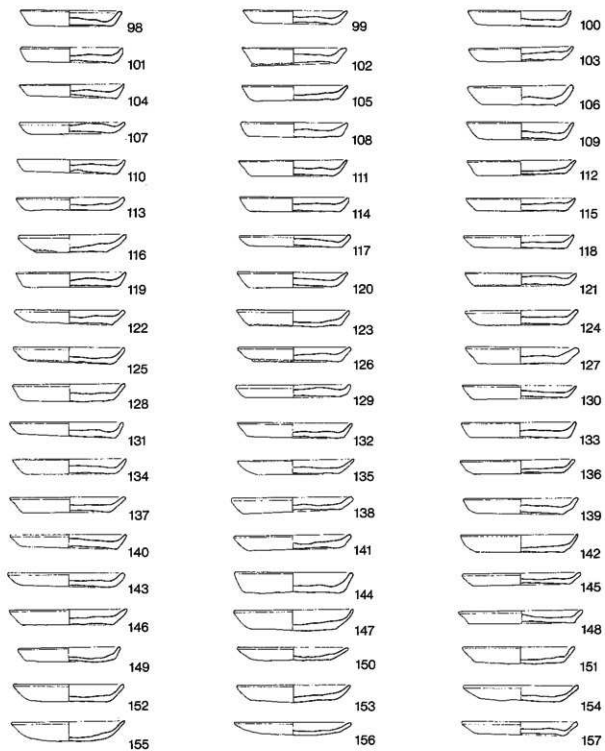
平均値は口径15.7cm、底径10.4cm、器高3.0cm。計測値は口径14.6~16.1cm、底径7.0~12.0cm、器高2.2~3.5cmである。底部の切離しは、158~185が糸切り、186、187がヘラ切りであるが、ヘラ切りのものはSD-05の埋土から混入した可能性がある。158、172は胎土中に赤色粒を含む。

丸底杯 (188~191)

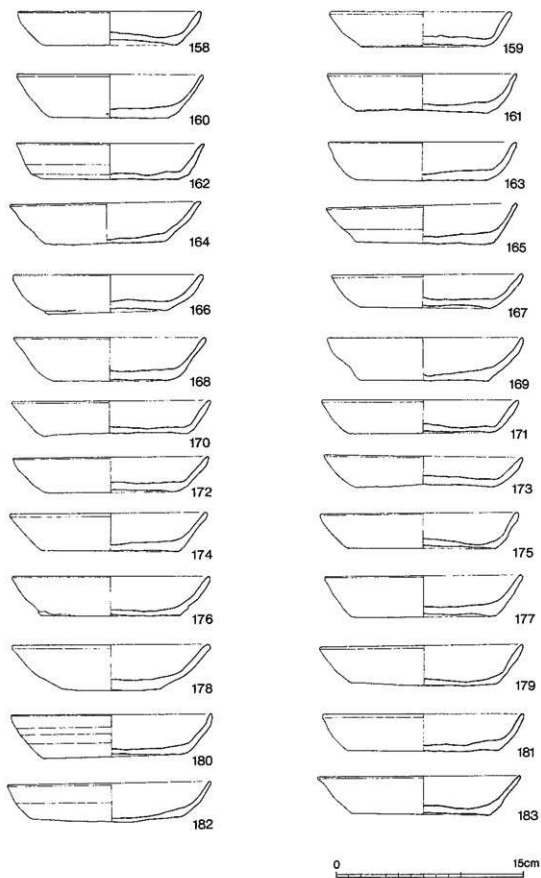
平均値は口径15.1cm、器高3.4cm。計測値は口径14.3~16.0cm、器高3.2~3.5cmを測り、底部の切離しは全てヘラ切りであるがSD-05の埋土から混入した可能性もある。

高台付杯 (192)

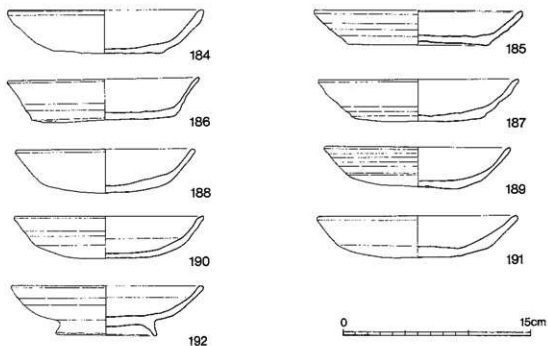
丸底杯に高台の付いたものであり、器面調整にヘラ磨き手法は用いられない。他のヘラ切り底の小皿、杯と同様の理由により、SD-05の埋土から混入した可能性を考える必要がある。口径15.4cm、器高3.9cm、高台径8.1cmを測り、体部の底部の切離しはヘラ切りであり、板目状圧痕が残される。



第18图 SD-06出土土器实测图·1(缩尺1/3)



第19圖 S D-06出土土師器実測図・2 (縮尺1/3)



第20図 SD-06出土土師器実測図・8(縮尺1/3)

SD-01

表1 土師器計測表

器種	器物番号	整理番号	口径	底径	器高	ヘラ	糸	板目	ナデ	備考
土師器 小皿	1	106	84	69	9		○			
土師器 小皿	2	108	97	74	9		○		○	
土師器 小皿	3	130	86	72	12			○	○	
土師器 小皿	4	116	87	68	11	○		○	○	
土師器 小皿	5	117	88	69	13	○		○	○	
土師器 小皿	6	127	88	72	14	○		○	○	
土師器 小皿	7	93	89	67	10	○		○	○	
土師器 小皿	8	126	89	64	10	○		○	○	
土師器 小皿	9	119	89	—	16	○			○	
土師器 小皿	10	88	90	58	14	○		○	○	
土師器 小皿	11	104	91	68	10	○		○	○	
土師器 小皿	12	90	93	59	17	○		○	○	
土師器 杯	13	123	150	104	29		○		○	
土師器 杯	14	128	152	88	33		○	○	○	
土師器 杯	15	89	172	113	36	○			○	
土師器 丸底杯	16	1051	157	—	37	○				
土師器 丸底杯	17	103	161	—	36	○				
土師器 丸底杯	18	1054	164	—	32	○				
土師器 丸底杯	19	1053	169	—	33	○				
土師器 丸底杯	20	1052	170	—	30	○				
土師器 丸底杯	21	121	156	—	36	○				
土師器 丸底杯	22	112	164	—	36	○		○	○	
土師器 丸底杯	23	117	160	—	36	○		○	○	
土師器 丸底杯	24	100	166	—	40	○		○		
土師器 丸底杯	25	99	172	—	41	○				
土師器 丸底杯	26	109	164	—	38	○				

SD-05

器種	品番	型番	口径	底径	器高	ヘラ	糸	板目	ナデ	備考
土師器 小皿	27	145	86	38	13		○	○	○	
土師器 小皿	28	40	90	71	15		○	○	○	
土師器 小皿	29	35	91	69	12		○	○	○	
土師器 小皿	30	78	91	73	10		○	○	○	
土師器 小皿	31	307	91	47	17		○	○	○	
土師器 小皿	32	21-2	98	74	14		○	○	○	
土師器 小皿	33	65	83	65	12	○		○	○	
土師器 小皿	34	66	86	62	11	○		○	○	
土師器 小皿	35	43	86	69	12	○		○	○	
土師器 小皿	36	79	87	67	10	○		○	○	
土師器 小皿	37	41	87	67	11	○		○	○	
土師器 小皿	38	81	87	60	11	○		○	○	
土師器 小皿	39	82	87	-	13	○		○	○	
土師器 小皿	40	59	88	61	11	○		○	○	
土師器 小皿	41	80	88	71	11	○		○	○	
土師器 小皿	42	61	88	64	13	○		○	○	
土師器 小皿	43	50	89	67	12	○		○	○	
土師器 小皿	44	306	89	-	14	○		○	○	
土師器 小皿	45	145	90	71	12	○		○	○	
土師器 小皿	46	26	90	-	17	○		○	○	
土師器 小皿	47	76	91	68	13	○		○	○	
土師器 小皿	48	68	91	-	15	○		○	○	
土師器 小皿	49	13	92	-	15	○		○	○	
土師器 小皿	50	143	93	-	13	○		○	○	
土師器 小皿	51	197	93	69	13	○		○	○	
土師器 小皿	52	39	94	68	11	○		○	○	
土師器 小皿	53	134	94	78	12	○		○	○	
土師器 小皿	54	21-1	94	64	14	○		○	○	
土師器 小皿	55	308	94	73	14	○		○	○	
土師器 小皿	56	20	94	-	15	○		○	○	
土師器 小皿	57	22	96	68	15	○		不明	○	
土師器 小皿	58	37	96	76	13	○		○	○	
土師器 小皿	59	38	102	77	12	○		○	○	
土師器 高台付小皿	60	67	86	57	18	○		○	○	
土師器 杯	61	32	149	90	28		○	○	○	
土師器 杯	62	194	155	89	35		○	○	○	
土師器 杯	63	36	157	107	30		○	○	○	
土師器 杯	64	42	159	98	31		○	○	○	
土師器 杯	65	29	157	93	33		○	○	○	
土師器 杯	66	304	161	102	32		○	○	○	
土師器 杯	67	31	167	84	30		○	○	○	
土師器 杯	68	136	160	66	36		○	○	○	
土師器 杯	69	33	158	115	24	○		○	○	
土師器 杯	70	74	154	-	31	○		○	○	
土師器 杯	71	57	152	109	33	○		○	○	
土師器 杯	72	140	155	111	25	○		○	○	
土師器 杯	73	75	156	103	30	○		○	○	
土師器 杯	74	53	166	113	29	○		○	○	
土師器 丸底杯	75	195	159	-	38	○		○	○	
土師器 丸底杯	76	196	156	-	37	○		○	○	
土師器 丸底杯	77	62	152	-	30	○		○	○	
土師器 丸底杯	78	69	160	-	30	○		○	○	
土師器 丸底杯	79	25	154	-	31	○		○	○	
土師器 丸底杯	80	70	154	-	31	○		○	○	
土師器 丸底杯	81	72	160	-	30	○		○	○	
土師器 丸底杯	82	7	155	-	31	○		○	○	
土師器 丸底杯	83	6	157	-	29	○		○	○	

赤土紋を含む

SD-05

器種	器物番号	器口径	底径	器高	ヘラ	糸	板目	ナデ	備考
土師器 丸底杯	84	15	157	-	30	○			
土師器 丸底杯	85	44	154	-	33	○			
土師器 丸底杯	86	141	156	-	33	○		○	
土師器 丸底杯	87	12	159	-	32	○		○	
土師器 丸底杯	88	137	164	-	33	○		○	
土師器 丸底杯	89	84	161	-	35	○		○	
土師器 丸底杯	90	147	162	-	35	○		○	
土師器 丸底杯	91	34	172	-	35	○			
土師器 丸底杯	92	11-2	168	-	36	○		○	
土師器 丸底杯	98	1	162	-	37	○			
土師器 丸底杯	94	5	165	-	37	○		○	
土師器 丸底杯	95	146	163	-	40	○			
土師器 丸底杯	96	11-1	164	-	40	○		○	
土師器 丸底杯	97	4	169	-	43	○			

SD-06

器種	器物番号	器口径	底径	器高	ヘラ	糸	板目	ナデ	備考
土師器 小皿	98	189	81	67	13	○			
土師器 小皿	99	239	82	61	11	○	不明	○	
土師器 小皿	100	202	82	66	12	○		○	
土師器 小皿	101	208	82	70	12	○		○	
土師器 小皿	102	177	82	67	13	○	不明	○	
土師器 小皿	103	278	83	62	11	○		○	
土師器 小皿	104	206	84	71	10	○		○	
土師器 小皿	105	203	84	61	14	○		○	
土師器 小皿	106	172	84	63	15	○		○	
土師器 小皿	107	262	85	60	9	○		○	
土師器 小皿	108	290	85	70	12	○		○	
土師器 小皿	109	205	85	59	14	○		○	
土師器 小皿	110	255	86	74	10	○		○	
土師器 小皿	111	234	86	71	11	○		○	
土師器 小皿	112	204	86	64	12	○		○	
土師器 小皿	113	210	87	67	10	○		○	
土師器 小皿	114	237	86	71	12	○		○	
土師器 小皿	115	235	87	71	10	○		○	
土師器 小皿	116	256	87	56	14	○		○	
土師器 小皿	117	199	88	72	9	○		○	
土師器 小皿	118	212	88	73	10	○		○	赤色粒を含む
土師器 小皿	119	209	88	74	12	○		○	
土師器 小皿	120	221	88	69	12	○		○	赤色粒を含む
土師器 小皿	121	161	89	71	10	○		○	
土師器 小皿	122	211	89	64	11	○		○	
土師器 小皿	123	222	89	72	13	○		○	
土師器 小皿	124	213	90	64	12	○		○	
土師器 小皿	125	254	90	67	12	○		○	
土師器 小皿	126	298	90	68	12	○		○	
土師器 小皿	127	171	90	68	13	○	不明	不明	
土師器 小皿	128	247	90	65	14	○		○	
土師器 小皿	129	263	91	72	10	○		○	
土師器 小皿	130	214	91	72	11	○		○	
土師器 小皿	131	264	91	78	11	○		○	
土師器 小皿	132	163	91	76	12	○		○	
土師器 小皿	133	207	91	78	12	○		○	
土師器 小皿	134	238	91	71	12	○		○	
土師器 小皿	135	153	92	65	11	○		○	
土師器 小皿	136	182	92	71	11	○		○	

SD-06

器種	建物の番号	製造番号	口径	底径	器高	ヘラ	糸	板目	ナデ	備考
土師器 小皿	137	198	92	70	12		○	○		赤色粒を含む
土師器 小皿	138	241	92	77	12		○	○	○	
土師器 小皿	139	296	92	69	13		○	○	○	
土師器 小皿	140	225	93	75	10		○	○	○	
土師器 小皿	141	233	93	72	11		○	○	○	内面に黒色付着物
土師器 小皿	142	155	93	71	14		○	○	○	
土師器 小皿	143	243	94	68	11		○	○	○	
土師器 小皿	144	168	94	74	15		○	○	○	
土師器 小皿	145	246	95	77	9		○	○	○	
土師器 小皿	146	161	95	73	12		○	○	○	
土師器 小皿	147	217	95	68	16		○	○	○	
土師器 小皿	148	271	99	85	10		○	○	○	
土師器 小皿	149	181	82	71	11	○		○	○	
土師器 小皿	150	170	87	61	10	○		○	○	
土師器 小皿	151	190	89	71	13	○		○	○	
土師器 小皿	152	175	89	62	14	○		○	○	内面に黒色付着物
土師器 小皿	153	176	90	64	14	○		○	○	
土師器 小皿	154	184	91	63	12	○		○	○	
土師器 小皿	155	174	91	-	15	○		○	○	
土師器 小皿	156	179	92	-	10	○		○	○	
土師器 小皿	157	285	92	70	10	○		○	○	赤色粒を含む
土師器 杯	158	220	146	107	27		○	○	○	赤色粒を含む
土師器 杯	159	274	148	99	28		○	○	○	
土師器 杯	160	287	149	94	35		○	○	○	
土師器 杯	161	282	154	101	29		○	○	○	
土師器 杯	162	223	150	110	29		○	○	○	
土師器 杯	163	284	150	103	31		○	○	○	
土師器 杯	164	160	156	95	32		○	○	○	
土師器 杯	165	244	153	103	30		○	○	○	
土師器 杯	166	291	154	93	30		○	○	○	全体的に煤ける
土師器 杯	167	249	154	103	26		○	○	○	
土師器 杯	168	273	153	89	35		○	○	○	
土師器 杯	169	259	161	103	34		○	○	○	
土師器 杯	170	272	160	115	26		○	○	○	
土師器 杯	171	288	160	113	27		○	○	○	外面全体に煤ける
土師器 杯	172	230	156	99	28		○	○	○	赤色粒、煤ける
土師器 杯	173	279	159	107	22		○	○	○	
土師器 杯	174	283	160	109	30		○	○	○	
土師器 杯	175	236	161	117	28		○	○	○	
土師器 杯	176	242	159	111	32		○	○	○	全体的に煤ける
土師器 杯	177	231	158	116	33		○	○	○	
土師器 杯	178	302	158	79	36		不明	不明	不明	
土師器 杯	179	260	164	116	32		○	○	○	
土師器 杯	180	232	161	109	33		○	○	○	
土師器 杯	181	245	161	120	30		○	○	○	
土師器 杯	182	228	162	119	31		○	○	○	
土師器 杯	183	215	164	110	30		○	○	○	
土師器 杯	184	219	163	113	27		○	○	○	
土師器 杯	185	178	153	84	34		○	○	○	
土師器 杯	186	187	155	102	33	○		○	○	
土師器 杯	187	185	160	70	33	○		○	○	
土師器 丸底杯	188	258	143	-	35	○		○	○	
土師器 丸底杯	189	192	146	-	32	○		○	○	
土師器 丸底杯	190	191	153	-	34	○		○	○	
土師器 丸底杯	191	265	161	-	33	○		○	○	
土師器 高台付杯	192	257	154	81	39	○		○	○	

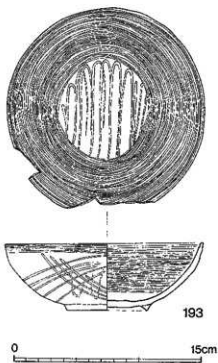
2) 瓦器

SD-01出土瓦器 (193, 194)

193, 194は畿内楠葉系の瓦器碗である。出土地点は他の土師器類とは異なり、SD-01-dの北端から約30m地点の最下層である。周辺に他の土器の出土はみられない。

193は口径15.8cm、器高5.3cm、高台径6.5cmを測る。体部は丸味をもち、口縁部付近で緩やかに屈曲する。高台は小さく、断面形は三角形を呈し、口縁部内端に1条の沈線が巡る。内外面ともに黒く燻され、ヘラ磨きが施される。外面のヘラ磨きは3分割して施され粗く、内面は横方向に細かい。内底には暗文が施される。また、器表には内外面ともに縦長の指押さえ痕が残される。内面は器面調整の為に凹凸は殆ど無く、器表の光沢の違いによって確認できる程度ではあるが、これは内面に親指を、外面に人差し指、或いは中指をあてて器形を整えた痕跡であると思われる。器壁内面は白色を呈し、器質は矮弱で軽い。

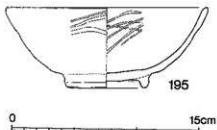
194は口径15.4cm、器高5.2cm、高台径5.1cmを測り、体部は前者と比較すると腰部分の膨らみが少なく、やや体部の立ち上がりが急で、口縁部下の屈曲もやや明瞭である。高台は小さく、口縁部内端に1条の沈線が巡る。内外面ともに黒く燻され、外面のヘラ磨きは3分割され粗く、内面は細かく横方向に施される。内底には磨耗しており顕著ではないが暗文が施されている。器壁内面は白灰色を呈し、焼成はあまく、矮弱である。



第21図 SD-01出土瓦器実測図 (縮尺1/3)

SD-03出土瓦器 (195)

SD-03南辺の中央部付近で出土した瓦器であり、この遺構の時期的指標となる唯一の遺物である。口径16.0cm、器高6.4cm、高台径6.8cmを測り、表面は内外ともに黒く燻され光沢があり、粗いヘラ磨きが施される。器壁内面は灰色を呈する。



第22図 SD-03出土瓦器実測図 (縮尺1/3)

SD-05出土瓦器（196～211）

完形に近いものが多いのが特徴的である。高台径の大小によって大きく2つに分類出来るが、さらなる分類も可能である。また、図示はしていないが在地系瓦器に伴って畿内楠葉系の瓦器碗が出土しているが、総数は在地系の1%にも満たない。

196は口径16.0cm、器高4.6cm、高台径6.7cmを測る。内外面が部分的に黒く燻され、その他は橙褐色を呈し、内外面ともに粗いヘラ磨きが施される。腰から底部にかけてはやや肉厚であり、口縁端部は角張る。

197は口径16.0cm、器高4.7cm、高台径7.0cmを測る。表面の色調は明灰色～白灰色を呈し、器壁内面も同様である。ヘラ磨きは不明瞭であり、外底面には板目状圧痕が残される。

198は口径17.1cm、器高5.3cm、高台径6.8cmを測る。高台は小さく矮弱であるが安定感はある。内外面、器壁内面の色調は白灰色を呈し、ヘラ磨きは器表の磨耗のために不明瞭である。外面底部に十字形のヘラ書きがある。

199は口径16.2cm、器高5.4cm、高台径6.8cmを測る。口縁部は外湾しながら外に開く。表面の色調は明灰色を呈し、器壁内面は明灰色～白灰色を呈する。外面にはヘラ磨きが施されているが、器表が磨耗しており顕著ではない。

200は口径16.6cm、器高5.1cm、高台径6.5cmを測る。外面と内面の口縁部付近のみ黒く燻され、その他の内面は橙褐色を呈する。粗いヘラ磨きが外面のみに施され、底部に板目状圧痕が残される。

201は口径15.9cm、器高5.6cm、高台径6.3cmを測る。内面の3分の2が黒く燻され、その他は淡橙褐色を呈する。粗く乱雑なヘラ磨きが内面に施され、器質は硬質である。

202は口径16.8cm、器高5.7cm、高台径6.4cmを測る。外面は黒灰色、内面は黒灰色～白灰色を呈し、重ね焼きの痕跡が残る。内外面ともに粗いヘラ磨きが施され、内面のヘラ磨きは4分割して施される。成形は底部押し出し技法によるものと思われる。

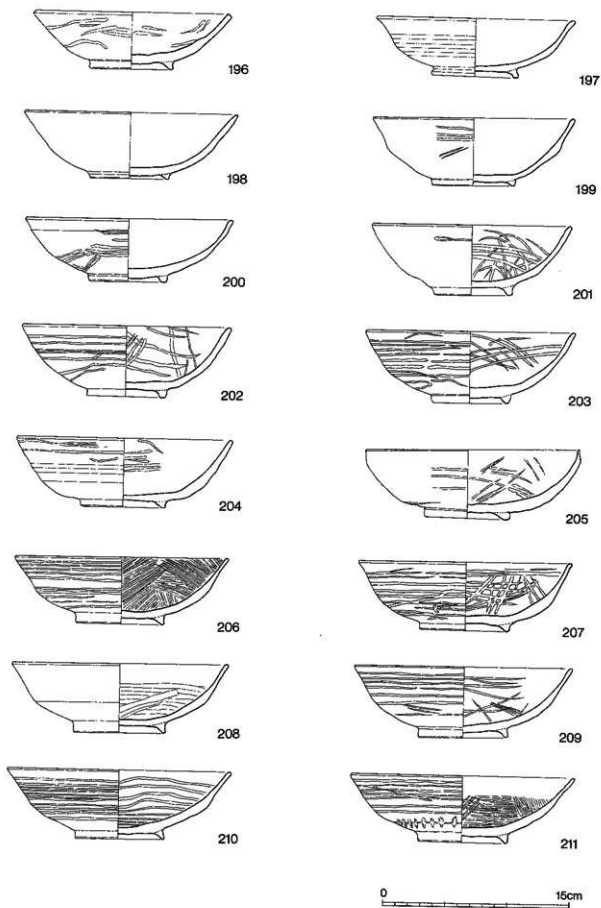
203は口径16.9cm、器高5.7cm、高台径6.4cmを測る。内外面ともに黒く燻され、器壁内面は黒灰色を呈する。粗いヘラ磨きが内外面に施され、内面のヘラ磨きは概ね横方向である。

204は口径17.4cm、器高5.5cm、高台径6.3cmを測る。外面の口縁部付近と内面の大部分は明黒色、その他は白灰色を呈する。器壁内面は白灰色である。ヘラ磨きは内外面ともに施されているが、器表は磨耗のため不明瞭である。内面に重ね焼きの痕跡がみられる。

205は口径17.1cm、器高5.4cm、高台径6.8cmを測る。外面の色調は黒灰色、内面は灰色を呈し、内外面ともに不明瞭ではあるがヘラ磨きが施される。形態的には他と比してやや異質であり、肥後型とされるものの中に類似するものがある。

206は口径17.1cm、器高5.4cm、高台径7.1cmを測る。表面の色調は外面は白灰色、内面は明灰色を呈し、器壁内面は明灰色を呈する。ヘラ磨きは、外面は回転力を利用して横方向に施され、内面は同一方向に粗く施された後に4分割して細かく施される。底部押し出し形成によるものであり、外底面には板目圧痕が残される。

207は口径17.1cm、器高5.5cm、高台径7.3cmを測る。色調は概ね外面上半部は明黒色、下半部は白灰色を呈し、内面は明黒色を呈する。内外面ともに粗いヘラ磨きが施され、内面のヘラ



第23图 SD-05出土瓦器实测图(缩尺1/3)

磨きは口縁部は横方向に施されるが他の部分は乱雑であり、概ね同一方向に施されるが、部分的には分割ヘラ磨き的に施される箇所もある。成型は底部押し出し技法によるものである。

208は口径17.3cm、器高5.6cm、高台径7.4cmを測り、内外面ともに部分的な黒変がみられるが、概ね橙褐色を呈する。ヘラ磨きは内面のみに施される。

209は口径17.5cm、器高5.6cm、高台径7.2cmを測る。色調は内外面ともに明黒色を呈するが、部分的に白灰色を呈する部分もあり、重ね焼きの痕跡が残る。ヘラ磨きは内外面に施され、内面のヘラ磨きは底部は同一方向に施され、口縁部を除く他の部分は4分割して施される。外底部には板目状圧痕が残され、底部押し出し成形によるものである。

210は口径17.9cm、器高5.5cm、高台径7.2cmを測り、内外面の大部分が黒く燻されており、内面には重ね焼きの痕跡が残り、その部分は淡橙褐色を呈する。内外面ともにヘラ磨きが施されるが、外面のヘラ磨きは回転力を利用して施され、内面は同心円状に施される。また、外底面には板目状圧痕が残される。

211は口径18.0cm、器高5.3cm、高台径7.2cmを測り、口縁部付近の一部分が黒変する他は橙褐色を呈する。内外面ともにヘラ磨きが施され、外面のヘラ磨きは回転力を利用したものであり、内面のヘラ磨きは口縁部付近はなで消され、その他は5分割して施され幅が狭く、密である。底部押し出し技法による成形であるが、それとは無関係に、外面の腰部分には粘土の接合痕を指押さえした痕跡が残る。

SD-06出土瓦器 (212~217)

SD-05よりも後出するものであり、出土総数、保存状況は著しく低下する。また、畿内系のものはみられない。

212は口径16.5cm、器高4.2cm、高台径7.1cmを測る。色調は内外面、器壁内面ともに白灰色を呈する。高台の体部との接合部には切り込みが入り、胎土は精良であるが、焼成はややあまい。

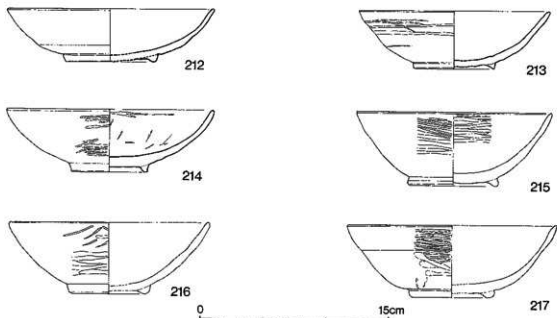
213は口径15.3cm、器高4.6cm、高台径6.6cmを測る。内外面、器壁内面ともに灰色を呈する。胎土は精良であり、焼成は良好である。ヘラ磨きは外面のみに施される。

214は口径16.6cm、器高5.0cm、高台径6.4cmを測る。色調は内外面、器壁内面ともに灰色を呈し、口縁部付近は黒色を呈する。また、重ね焼きにより内面底部は円形に黒変する。外底部には糸切り痕が残され、不明瞭ではあるが内外面にヘラ磨きが施され、内面にはコテあて痕が多く残る。

215は口径15.6cm、器高5.9cm、高台径7.3cmを測る。色調は内外面、器壁内面ともに白褐色を呈し、器壁内面は部分的に褐色味を帯びる。器面調整は内外面ともにヘラ磨きが施される。

216は口径16.0cm、器高5.7cm、高台径6.4cmを測る。内面全体と外面口縁部付近は黒く燻され、その他は淡橙白褐色を呈する。内外面にヘラ磨きが施されるが、内面は不明瞭である。

217は口径16.7cm、器高5.7cm、高台径6.8cmを測る。内外面ともに黒く燻されるが、内面底部は白灰色を呈する。器壁内面は口縁部付近と器壁に近い部分は白灰色を呈し、その他は暗灰色を呈する。外面にはヘラ磨きが施される。



第24図 SD-06出土瓦器実測図(縮尺1/3)

SK-02出土瓦器(218~220)

供献土器であり、218, 219, 220の順に重なった状態で確認された。

218は瓦器の碗であり、大きく口縁部が歪み、口径15.2~17.0cm、器高5.7cm、高台径6.0cmを測る。色調は暗灰色を呈し、外面に横方向、内面に同一方向のヘラ磨きが施される。焼成は良好で、器質は須恵質に近い。高台の底部に板目状の圧痕が残っており、体部と高台の接合部には切り込みが入る。

219は瓦器の碗である。口径16.4cm、器高5.2cm、高台径7.1cmを測り、器表の色調は内外面ともに黄褐色を呈するが、内面と外面の一部は黒変し、内面は全体的に燻されていた可能性がある。磨耗のため顕著ではないが、内外面とも部分的にヘラ磨きが施されていたようであり、光沢が残る。胎土は灰褐色を呈し、若干の小砂粒を含む。

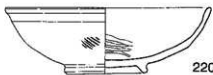
220は瓦器の碗である。口径16.5cm、器高5.3cm、高台径6.6cmを測る。外面は磨耗しているが全体的に黒く燻され、ヘラ磨きが施されていたようであり、黒色の部分と白灰褐色の部分とがあり、黒色の部分は光沢がある。内面も磨耗しており、底部分に黒変する箇所はあるが全体的に燻されていた様子ではなく、ヘラ磨きは同一方向に施される。器壁内面の色調は器表側は黄灰褐色、中心側は黒色を呈する。外面底部と高台底面には板目状の圧痕が残され、外面の体部中位にも叩き状の板目が残される部分がある。



218



219



220



第25図 SK-02出土瓦器実測図(縮尺1/3)

3) 白磁

碗 (221~231)

221はSD-01の上師器類に伴って出土した。口径15.9cm、器高6.1cm、高台径7.9cmを測り、口縁は玉縁状を呈し、体部は僅かに内湾しながら直線的に伸びる。胎土は白灰色を呈し、乳白色の釉が腰の部分まで掛る。外面には気泡による斑が比較的多く残り、釉剥げが部分的にみられる。

222~224はSD-05からの出土である。

222は口径16.3cm、器高6.3cm、高台径7.7cmを測り、体部は腰の部分で内湾し、口縁は玉縁状を呈する。胎土は白色を呈し、乳白色の釉が高台際まで掛けられる。外面には気泡による斑が残り、指跡や擦過状の釉剥げがみられる。

223はSD-05の最上層からの出土である。口径16.8cm、器高6.3cm、高台径7.5cmを測り、玉縁状口縁を呈する。胎土は白色で、乳白色の釉が掛けられるが、外面では比較的無釉部分が広く、気泡による斑がみられ、内面口縁部付近の釉溜りはやや厚い。

224は口径16.8cm、器高6.3cm、高台径8.1cmを測り、玉縁状口縁を呈する。胎土は白色を呈し、乳白色の釉が掛けられ、外面には気泡による斑がみられる。

225~230はSD-06からの出土である。口径17.4cm、器高6.5cm、高台径7.0cmを測り、玉縁状口縁を呈する。胎土は白色を呈し、内面には釉欠けがみられる。221~224と比較すると、口径、器高ともに一回り大きく、体部の器壁が薄く軽量であり、釉の色調は灰色が強く薄く掛けられ、質も滑らかであり気泡による斑があまり見られない。等の相違点がある。

226は口径16.8cm、器高7.0cm、高台径6.3cmを測る。体部は深く、腰の部分で内湾し直線的に立ち上がり、口縁部は外に摘み出され端部はほぼ水平であり、高台は細く、高い。胎土は淡灰白色を呈し、やや緑色味を帯びた半透明の釉が体部全体に薄く掛けられる。

227は口径17.2cm、器高6.5cm、高台径6.1cmを測る。体部は緩やかに内湾しながら大きく外に開き、口縁部は外に摘み出され端部はやや内傾する。乳白色の釉が高台付近にまで掛けられるが、釉の色調、質感は玉縁口縁の碗と類似する。

228は口径17.3cm、器高6.5cm、高台径6.6cmを測る。体部は腰の部分から緩やかに内湾し、大きく外に開く。口縁部は外に摘み出され、端部は僅かに内傾する。胎土は僅かに褐色味を帯びた白色を呈し、白濁色の釉が高台付近にまで掛けられ、器表には無数の貫入が入り、見込みには環状の重ね焼きの痕跡が残る。

229は口径18.7cm、器高6.0cm、高台径6.1cmを測る。体部は中央部付近から内湾し、口縁部は外湾しながら外に大きく開く。高台は細く、低めである。胎土は黒色粒を僅かに含み、淡灰白色を呈する。やや緑色味を帯びた半透明の釉が高台まで掛けられる。

230は口径17.5cm、器高5.8cm、高台径5.7cmを測る。体部外面は腰の部分から僅かに内湾するが、内面は殆ど直線的である。口縁部は緩やかに外湾し、端部は細く鋭い。高台は低めである。胎土は褐色味を帯びた白色を呈し、白濁色の釉が高台まで掛けられる。器表には無数の貫入が入る。

231はSD-01から出土した碗である。口径13.4cm、器高3.9cm、高台径5.1cmを測る。口縁

部は外に摘み出されるが、端部は丸味をもち、面を成さない。胎土は灰白色を呈し、緑色味を帯びた半透明の釉が高台付近にまで掛けられる。見込みに櫛目文が施される。

高台付皿（233～238）

全てSD-06からの出土である。233は口径9.3cm、器高2.1cm、高台径5.2cmを測り、口縁端部は細く鋭い。胎土は灰白色を呈し、乳白色の釉が掛けられるが、見込みの釉は輪状に掻き取られている。

234は口径9.5cm、器高2.2cm、高台径4.6cmを測る。口縁部は外に摘み出されるが、先端は丸くおさまられる。胎土は灰白色を呈し、白濁色の釉が体部中位から高台付近にまで掛けられ、部分的に高台まで垂れている。見込みの釉は輪状に掻き取られる。

235は口径9.7cm、器高2.0cm、高台径5.0cmを測る。口径に対して高台径が大きく、体部が短い。胎土は灰白色を呈し、やや緑色味を帯びた白濁色の釉が掛けられ、見込みの釉は輪状に掻き取られる。

236は口径9.7cm、器高2.3cm、高台径4.7cmを測る。口縁部は緩やかに外に摘み出され、先端はやや鋭角的である。胎土は褐色味を帯びた白色を呈し、白濁色の釉が掛けられる。器表には無数の貫入が入り、見込みの釉は指によって時計回りに掻き取られる。

237は口径9.9cm、器高2.7cm、高台径4.3cmを測る。胎土は灰白色を呈し、白濁色の釉が掛けられ、見込みの釉は輪状に掻き取られる。

238は口径10.1cm、器高2.3cm、高台径4.7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、乳白色の釉が掛けられ、見込みの釉は輪状に掻き取られる。

皿（232, 239～242）

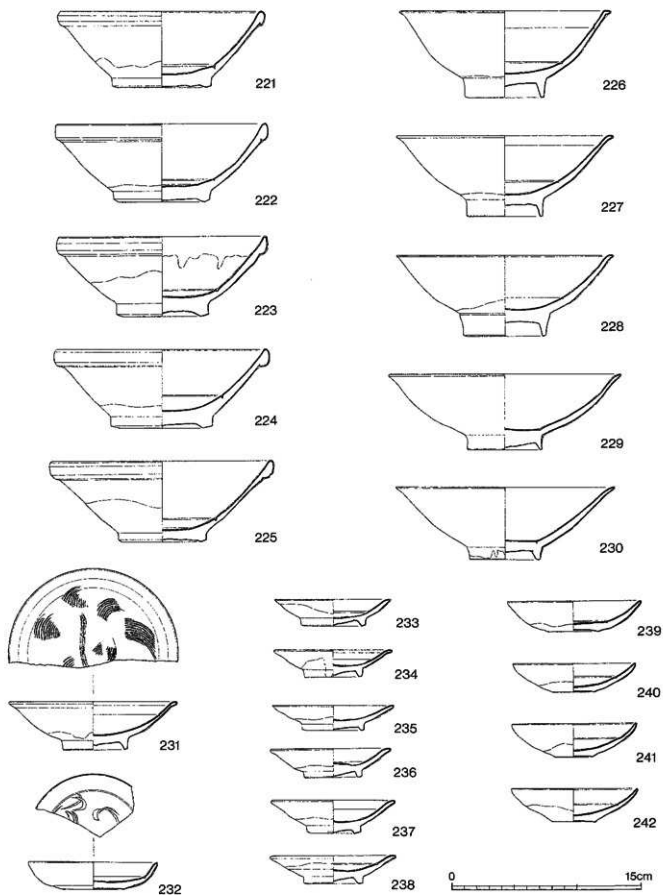
全てSD-06からの出土である。232は口径10.2cm、底径4.9cm、器高2.2cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緑色味を帯びた白濁色の釉が全体に掛けられ、外面底部の釉は円形に掻き取られる。見込みにはへら書きの文様が施される。

239は口径10.6cm、底径4.1cm、器高2.5cmを測る。胎土は灰白色を呈し、やや緑色味を帯びた半透明の釉が体部中位下まで掛けられる。また、焼成時に生じたものか使用時に生じたものかは不明であるが、口縁端部、釉の掛け際、石はぜの部分などの施釉部分と無釉部分の境目が鮮やかな燈色を呈している。

240は口径9.7cm、底径3.4cm、器高2.3cmを測る。胎土は灰白色を呈し、緑色味の帯びた白濁色の釉が体部中位まで掛かる。239と同様に釉の掛け際が燈色を呈する部分がある。

241は口径9.8cm、底径3.0cm、器高2.7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、黄緑色を帯びた釉が体部中位付近まで掛けられるが、釉の断面は白色を呈する。前者と同様に釉の掛け際が燈色を帯びる部分がある。

242は口径10.0cm、底径3.6cm、器高2.6cmを測り、胎土は灰白色を呈し、やや緑色味を帯びた半透明の釉が体部中位付近まで掛けられる。釉の掛け際が燈色を呈する部分がある。



第26圖 S D-01.05, 06出土白磁夾測圖(縮尺1/3)

4) 青磁

碗 (243~246)

全てSD-06からの出土である。

243は龍泉窯系の碗であり、SD-06の底部に置かれたような状態で出土した。十圧で部分的に破損しているものの、ほぼ完形品である。口径16.3cm、器高7.2cm、高台径6.4cmを測る。体部は深く重心が低く、腰の部分から屈曲して緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。外面は無文であり、内面に片切彫りの花文を有する。胎土は白灰色を呈し、透明度の高い淡黄緑色の釉が高台にまで掛けられる。

244~246は同安窯系の碗である。

244は口径17.5cm、器高7.5cm、高台径5.6cmを測る。体部外面には轆轤引きの跡が顕著に残り、口縁部は外に僅かに捻られる。外面に片切彫りの櫛刀による縦線が施され、内面に片切彫りの草花文が描かれるが、同安窯系青磁に顕著にみられる櫛刀による稲妻文は施されない。胎土は灰色を呈し、暗緑色の釉が腰の部分まで掛けられる。

245は口径16.8cm、器高7.1cm、高台径5.3cmを測る。外面に櫛刀による縦線が施され、内面には草文状の文様と稲妻文が施される。胎土は灰色を呈し、透明度の高い黄緑色の釉が高台際まで掛けられる。

246は口径17.2cm、器高7.0cm、高台径5.0cmを測る。外面に櫛刀による縦線が施され、内面には草文状の文様と稲妻文が施される。胎土は灰色を呈し、透明度の高い薄緑色の釉が高台際まで掛けられる。

皿 (247~252)

全てSD-06からの出土した同安窯系の青磁皿である。

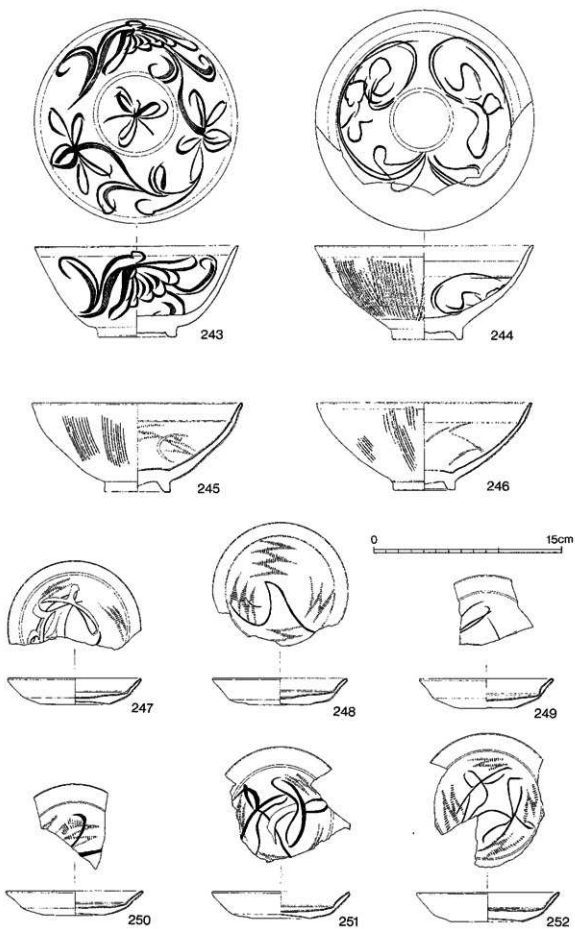
247は口径10.7cm、器高2.1cm、高台径5.3cmを測り、外面は無文で、内底に片切彫りの草花状の文様と、櫛書きの稲妻文が施される。胎土は灰色を呈し、透明感のある薄緑色の釉が全体に掛けられ、底部の軸は円形に掻き取られる。

248は口径10.8cm、器高2.1cm、高台径4.9cmを測る。外面は無文、内底に片切彫りの文様と、櫛書きの稲妻文が施される。胎土は灰色を呈し、透明感のある薄緑色の釉が全体に掛けられ、底部の軸は円形に掻き取られる。

249は口径10.7cm、器高2.3cm、高台径4.2cmを測る。外面は無文、内底には片切彫りの文様が施される。胎土は灰色を呈するが、部分的に褐色味が強い部分がある。やや透明感の無い黄緑色の釉が全体に掛けられ、底部の軸は円形に掻き取られる。

250は口径11.0cm、器高2.0cm、高台径4.7cmを測る。外面は無文、内底には片切彫りの文様と櫛書きの稲妻文が施される。胎土は灰色を呈し、透明感のある薄緑色の釉が全体に掛けられ、底部の軸は円形に掻き取られる。

251は口径11.1cm、器高2.1cm、高台径4.8cmを測る。外面は無文、内底には草花状の片切彫りの文様と櫛書きの稲妻文が施される。胎土は灰色を呈し、透明感のある黄緑色の釉が全体に掛けられ、底部の軸は円形に掻き取られ、その部分が燻されたように黒変している。



第27图 SD-06出土青磁实测图(缩尺1/3)

252は口径11.4cm、器高2.3cm、高台径5.7cmを測る。外面は無文、内底には草状の片切彫りの文様と、櫛書きの稲妻文が施される。胎土は灰色を呈し、透明感のある薄緑色の釉が全体に掛けられ、底部の軸は円形に掻き取られる。

5) 合子 (253~256)

4点の合子が出土した。

253はSD-01から出土した蓋である。口径4.8cm、器高1.4cmを測り、型作りで側面に菊花状の花弁が表現される。胎土は白灰色を呈し、外面と、内面の天井部に透明感の高い薄緑色の釉が掛けられる。



254~256はSD-06からの出土である。

254は青白磁の身であり、口径4.3cm、底径3.1cm、器高2.2cmを測る。型作りで側面に菊花状の花弁が表現される。胎土は白色を呈し、底部周辺を除く外面と、内面に不透明の青白色の釉が掛けられる。



255は白磁の身であり、口径4.0cm、底径3.3cm、器高2.5cmを測る。前者と同様に、側面に菊花状の花弁が表現されるが、体部中に段があり、受け部の立ち上がり部分は付け足されている。胎土は淡褐色を呈し、褐色味を帯びた白色の釉が側面と内面に掛けられる。



256は白磁の蓋であり、側面に赤絵が施される。口径5.3cm、器高1.9cmを測り、胎土は白色を呈し、乳白色の釉が全体に掛けられる。

第25図 合子実測図
(縮尺1/3)

6) 陶器 (257~260)

257, 258はSD-06からの出土である。

257は水差しであり、口径9.9cmを測り、胴部最大径は17.5cmに復元される。頸部と胴部の境に小さな段があり、その直下に注口が付され、注口部は急角度で立ち上がる。胎土は青灰色を呈し、黄色味の強い緑黄色の釉が掛けられるが、胎土との馴染みが悪く剥落する部分もある。

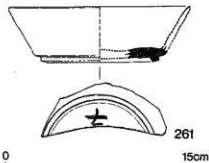
258は長胴の壺である。胴部最大径11.5cmを測る。胎土は橙褐色~青灰色を呈し、紫色粒を含む。やや緑色味を帯びる淡褐灰色の釉が掛けられるが、内面の下部は露胎である。

259は井戸(SE-01)から出土した無頸の甕の口縁部分である。口径17.1cmを測り、口縁部の横位に横長の耳が付けられていた痕跡がある。胎土は橙褐色を呈し、小砂粒及び赤色粒を多量に含み、器表には無数の石はぜがある。やや黄色味を帯びる灰白色の釉が全体に掛けられるが、内面は幅広の刷毛状のもので粗く塗られており、ムラが多い。

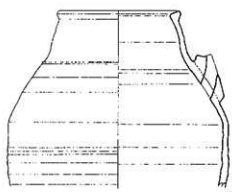
260は埋め甕として用いられていた底径37.3cmを測る大型の甕の底部である。

7) 墨書土器 (261)

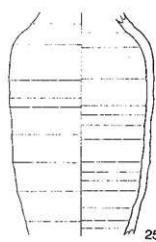
包含層からの出土であり、遺構に伴わない。須恵器の高台付き杯の底部付近のみの残存であり、高台径9.4cmに復元される。胎土は精良で明灰色を呈し、外底部には墨書がみられる。文字は部分的であり、判読出来ない。



第26図 墨書土器実測図 (縮尺1/3)



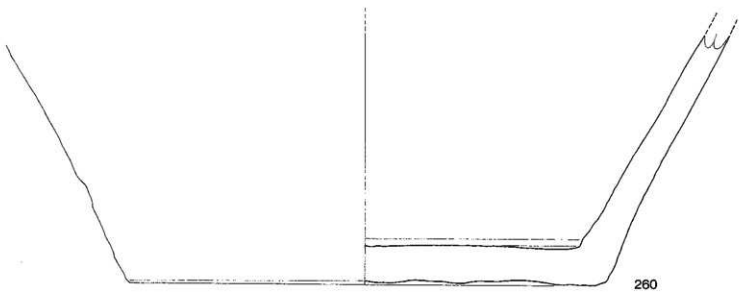
257



258



259



260

第30图 陶器实测图(附尺1/3)

8) 土製品

土鍾 (1~3)

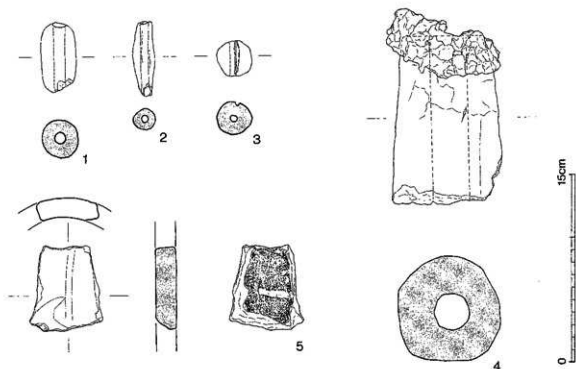
1はSD-05、2、3はSD-06からの出土である。1は長さ5.5cm、最大径3.1cm、孔径0.9cmを測る。色調は淡橙褐色~暗灰色を呈し、胎土に小砂粒を多く含む。2は長さ6.0cm、最大径1.8cm、孔径0.6cmを測る。色調は淡橙色を呈し、胎土は精良で小砂粒を殆ど含まない。3は球形を呈し、径2.5~2.8cm、孔径0.5cmを測り、挟りがある。色調は橙色を呈し、胎土には僅かに砂粒が入り、赤色粒を多く含む。

鞆羽口 (4)

鞆羽口はSD-05、SD-06からの出土があるが、その殆どがSD-05の比較的集中した範囲からの出土である。図示したものはSD-05から出土した鞆羽口であり、残存長15.5cm、最大径9.4cm、内孔最大径3.7cmを測る。図示した上方が炉内に挿入される部分であり、暗緑色の硝子状を呈する融解した灰が付着し、それによって孔の出口部分は半分近くが塞がれている。胎土は橙色を呈し、砂粒がやや多く含まれる。吹き出し部寄り表面には約3~5cm幅の紫色に変色する部分があり、これは鍛冶炉の炉壁の厚さに起因するものかと思われる。

瓦 (5)

丸瓦の小片であるが、調査区内においての瓦の出土はこの1点のみである。包含層からの出土であり、遺構に伴わない。厚さは1.5cmを測り、表側は淡橙灰褐色を呈しへう削りが施され、裏側は灰黒色を呈し、布目が残される。胎土は精錬され、器表側は白褐色、内面は灰黒色を呈する。中世に属するものかと思われるが、詳細は不明である。



第31図 土製品実測図 (縮尺1/3)

9) 石製品

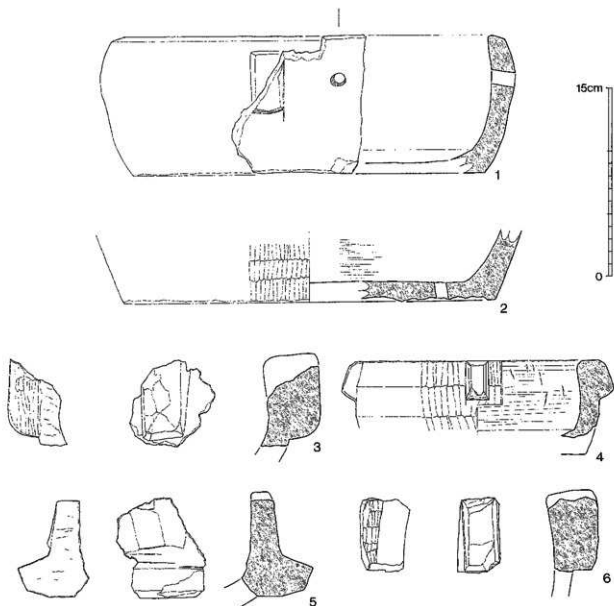
滑石製品 (1~14)

滑石製品はSD-01, SD-05, SD-06からの出土があるが、図示したものは全てSD-06からの出土である。

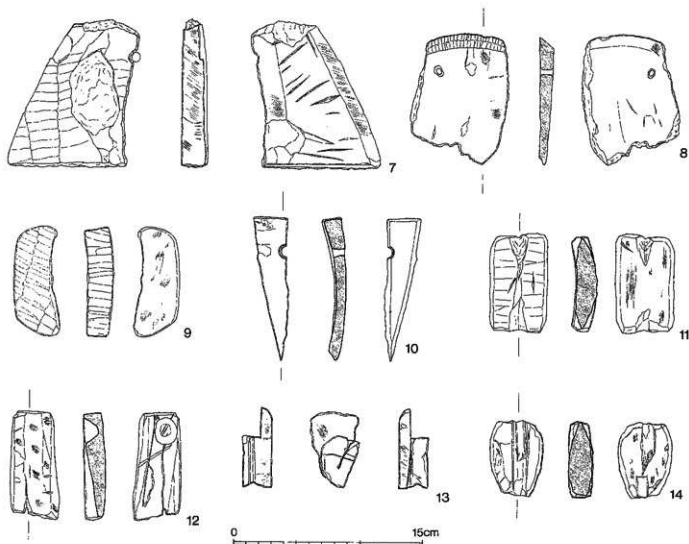
1は口径31.5cm、胴部最大径33.2cm、底径28.1cm、器高10.8cmに復元される大型の石鍋である。口縁部直下に把手が削り出され、その横位に孔が穿たれる。外面全体に煤が付着する。

2は底径29.8cmに復元される大型の石鍋の底部である。底面に穿孔があり、体部は直線的に立ち上がる。また、体部の外面には鑿状工具による細かい加工痕が残され、内面には横方向の搔痕が無数に残される。外面には全体的に煤が付着し、底面は剥落が著しい。

3, 4は石鍋の把手部分の破片であり、ともに大型品のものである。表面には煤が付着し、側面には鑿状工具による細かい加工痕が残される。



第32図 滑石製品実測図・1 (縮尺1/3)



第33図 滑石製品実測図・2 (縮尺1/3)

5は石鍋の鈎部分の破片であり、大型品のものである。体部外面部分には幅広の鑿状工具による加工痕が残されるが、鈎部分は平滑に仕上げられる。

6は口径19.3cmを測る小型の石鍋である。口縁部直下に縦長の把手が削り出され、底面には穿孔がある。外面には全体的に煤が付着し鑿状工具による加工痕が残され、内面には横方向の掻痕が残る。

7は石鍋を再加工したものであるが、用途は不明である。切断面には鋸引き状の加工痕が残される。

8は石鍋の底部を再加工したもので、体部との切断面を平滑に研磨している。割れ口が火を受けている痕跡があり、温石として利用されたものと思われる。

9は石鍋の体部を再加工したものであり、温石として利用されたものと思われる。側面には切断面を鑿状工具で面取りした加工痕が残される。

10は石鍋の口縁部を再加工したもので、鋸引き状の加工痕が残される。用途は不明である。

11は石鍋の口縁部、または胴部を鑿に再加工したものである。両面両端の計4ヶ所に抉りが入られる。

12は石鍋を再加工したものであるが、用途は不明である。一方の面は平滑に仕上げられているが、その裏面には円形に抉られた部分や、直線的、または蛇行する浅い溝が彫られている。

13は石鍋の把手部分をコテ状に再加工したものである。つまみには孔が穿たれる。

14は石鍋の胴部付近を再加工し、鑿としたものである。両面に抉りが入られる。

砥石 (15~18)

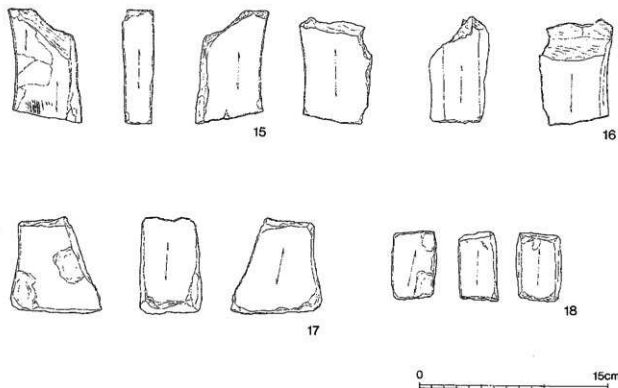
全てSD-06からの出土である。

15は粘板岩製の砥石である。残存部分で3面を使用し、表面は非常に滑らかであるので仕上げ用の砥石であると思われる。

16は粘板岩製の砥石で、基本的には15と同じタイプのものであるが、それよりも厚みがある。残存部位では3面が使用面とされ、使用面は非常に滑らかであり仕上げ用であると思われる。

17は砂岩系の石材を用いた砥石であり、2面を使用する。使用面は平滑ではあるが、ややざらつきがあり、粗研ぎ用の砥石であると思われる。

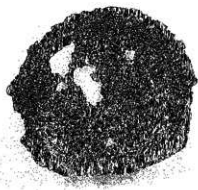
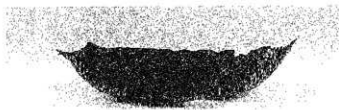
18は砂岩系製で小型の砥石であり、正面と側面の両面、及び上面が使用面とされ、粗研ぎ用であると思われる。



第34図 砥石実測図 (縮尺1/3)

10) 漆器

SD-05からは漆器の出土があった。木質部は完全に腐食して失われているが、碗状を呈しており、内面に塗布されていた漆質だけが遺存している。口径約13cm、器高約3cmを測り、肉眼観察では施文されていた痕跡は確認出来ない。



第35図 SD-05出土漆器

11) 現代の遺物

ビール瓶

調査区南部の檜樹坑から出土したガラス製の瓶である。口径2.6cm、器高28.8cm、底径7.3cmを測り、色調は透明度の低い暗褐色を呈する。現在流通しているものと比較すると、器高がやや低く、底径がやや大きく、また、胴部の立ち上がりが垂直的であり、胴部から頸部にかけての窄まりが急である。胴部の下位部には「NIPPON BEER KOSSEN CO. LTD」とあり、現在のサッポロ・ビールの前身である日本麦酒のものである事が分かる。これは昭和24年から同38年にかけての社名である。

ジュース瓶

調査区南東部の攪乱坑から出土したガラス製の瓶である。口径1.8~1.9cm、器高20.1cmを測り、色調は透明度の高い海青緑色を呈する。口縁部から頸部にかけては円柱状を呈するが、胴部は一辺約4.5cmの三角柱状を呈する。口縁部の外面には張り出しが見られず、コルク状のもので栓をしていたものと考えられる。胴部の一面には「高級飲料」の文字があり、他の一面には2行に分けて縦書きされた「登録商標」の文字があり、その下には五星にアラビア数字の9が絡みついたデザインのマークがあることから、現在も福岡市西区周船寺において操業している九星飲料工業の瓶であることが分かる。



第36図 現代の遺物

Ⅲ. まとめ

1. 遺構の時期

平安期から中世期にかけて、土師器は最も顕著な時期的指標となるものであり、当該期の九州における中心地、太宰府においては緻細な編年が組まれているが、糸島地方においては未だ未発展の状況にあり、太宰府の編年を参考に遺構の時期を検証してみることにする。

SD-01, SD-05, SD-06からは、まとまった量の土師器の出土があり、表2は、小皿と杯の計測平均値と、底部の切離し方法を表す糸切り底のものとはへら切り底のものとの混在状況の割合を示したものである。これらの数値は出土土器の全てから得たものではないが、発掘調査現場において遺存状況の良いものを番号を付して座標上に落とし、さらに完形に近いものを無作為に図化したものから得たものであり、統計学的有効性は失われないものと思われる。これらのデータによる糸切り底の増加現象からは、SD-06は他の2者よりも後出することが分かる。また計測平均値はいずれもSK1204の数値に類似し、その傾向からはSD-05はSD-01より先行するものであることが予想されるが、いずれも近似した数値であり、他の遺物との比較検討が必要である。

SD-05の底部切離し方法は、杯、小皿ともにへら切り底のものが優勢であり、小皿の計測平均値はSD1330の値とほぼ一致するが、杯についてはそれよりも口径が一回り大きく、むしろSK1204に近い数値となっている。また、杯の底部を押し出して丸底化させた丸底杯の存在が顕著である。輸入陶磁器の総数は少なく、玉縁口縁の白磁碗のみの出土であり、白磁の他の器種、青磁の出土はみられず、土師器、在地系の瓦器が中心的存在である。瓦器には少数であるが畿内系のもが含まれる。SD-01の小皿の計測平均値はSK1204とほぼ一致する。杯については出土総数が少なく、統計的処理の対象とするには疑問があるが、一応、これもほぼ一致している。底部の切離し方法は、小皿、杯類ともにへら切り底のものが優勢を占め、SD-05と殆ど等しい混在状況の割合を示す。畿内系の瓦器を含み、輸入陶磁器は出土総数は少量であるが白磁が出土し、青磁の出土はみられない。SD-06では、土師器の計測平均値はSK1204とほぼ一致する。底部の切離し方法はへら切り底と糸切り底の優劣関係が逆転し、糸切り底のものが優勢となるが、本文中にも触れたように、へら切り底のものは殆どが混入している可能性もあり、へら切り底は消滅していると捉える事も出来る。杯の増加、丸底杯の減少が顕著であり、輸入陶磁器については青磁を含んだ大量の出土があり、その反面瓦器碗が減少している。

以上のことから、SD-01とSD-05は、SD-05が僅かに先行するものの同時期に存在したと思われる。遺構の時期は、SD-01とSD-05を12世紀初頭～中頃、SD-06を12世紀中頃～後半と考える。また、SD-03, SE-01は、瓦器、青磁等の出土遺物の特徴、及び出土傾向から、SD-06と同じ時期であり、出土遺物は伴わないもののその位置関係から、SB-01はSD-01と、SB-02はSD-03, SD-06と同時期であると思われる。

表2 土師器の平均値と底部切離し方法

	SD-05	SD-01	SD-06	
小皿	口径	8.1cm	8.9cm	8.9cm
	底径	6.7cm	6.7cm	6.9cm
	器高	1.3cm	1.2cm	1.2cm
杯	糸切り	18%	17%	85%
	へら切り	82%	83%	15%
	口径	15.8cm	15.8cm	15.7cm
杯	底径	9.8cm	10.2cm	10.4cm
	器高	3.1cm	3.3cm	3.0cm
	糸切り	57%	67%	93%
	へら切り	43%	33%	7%

2. 遺構及び遺跡の性格

木舟の森遺跡のSD-03～06の溝状遺構が、館を取り囲む環濠、或いは堀の一部であったことは、ほぼ間違いないものと思われる。館の中心部と推定される地区は木舟の森の社域と、SD-05の東方に位置しているものと考えられるが、遺構の時期は少なくとも2時期に分かれ、それらは時期的に重なり合いながら存続し、12世紀初頭から後半にかけて、この地に何らかの有力者集団が存在していた事が窺える。また、畿内系瓦器の出土がみられる事から、一種の交易拠点であった可能性もある。さらに、SD-06からは大量の輸入陶磁器が出土しており、臨海した遺跡の立地から、私貿易の拠点の性格をもっていた時期もあったと考える事が出来る。

現在の遺跡周辺は、江戸時代初期の開拓事業によって埋め立てられ、水田地帯と化しているが、遺跡の存在した当時はその近辺にまで海水が及んでいたと考えられ、満潮時には小舟の航行を妨げない程度の深さはあったものと思われる。しかるにSD-01は、海水の流入を防ぐ潮溜り性格をもつと同時に、海からの敵襲を防御する堀的な性格を合わせもっていたものだと考えられる。もっとも、出入り口が狭く、その付近に住宅が密集していたであろうこの入江の最奥部付近に位置するこの地を、海から外敵が攻めてくるとは考えにくく、実際には精神的安堵感を与える程度の役目しか果たせなかったものと思われるが、松浦党、或いは女真族への警戒心がこの堀を掘らせた可能性は否めない。また、遺構の存在した時勢は、まさに平氏の台頭と滅亡の時期に重なっており、この遺跡の主の平氏政権との関係を考える必要があるであろう。



第37図 遺跡周辺における当該期の海岸線想定図 (縮尺1/25,000)

3. おわりに

今回の報告は整理の取り掛かりの時期が遅れ、不勉強なために内容的にも薄く、概報的内容しかもっていないものとなってしまった。掲載出来なかった遺物の中には重要なものも多く含まれ、特に土師器、瓦器、輸入陶磁器については検討の余地は大いに残されている。これらについては継続して整理を行ない、報告の機会を得たいと考えている。

別 表

遺物/整理番号対照表

遺物番号	整理番号	器種	出土地点	遺物番号	整理番号	器種	出土地点	遺物番号	整理番号	器種	出土地点	遺物番号	整理番号	器種	出土地点
1	106	土師器	SD-01G3c	41	80	土師器	SD-05A1c	81	72	土師器	SD-05A1b	121	161	土師器	SD-06A0b
2	108	土師器	SD-01G3c	42	61	土師器	SD-05Z3d	82	7	土師器	SD-05A1b	122	211	土師器	SD-06A0b
3	130	土師器	SD-01H4d	43	50	土師器	SD-05A4d	83	6	土師器	SD-05A1b	123	222	土師器	SD-06A0a
4	116	土師器	SD-01H3d	44	306	土師器	SD-05A1d	84	15	土師器	SD-05A1b	124	213	土師器	SD-06A0b
5	117	土師器	SD-01G3c	45	145	土師器	SD-05A1d	85	44	土師器	SD-05A3d	125	254	土師器	SD-06A0a
6	127	土師器	SD-01H2b	46	26	土師器	SD-05A2d	86	141	土師器	SD-05A1c	126	298	土師器	SD-06C0b
7	93	土師器	SD-01G4c	47	76	土師器	SD-05A1b	87	12	土師器	SD-05A1b	127	171	土師器	SD-06A0b
8	126	土師器	SD-01H2b	48	68	土師器	SD-05A3c	88	137	土師器	SD-05A1d	128	247	土師器	SD-06A0a
9	119	土師器	SD-01G3c	49	13	土師器	SD-05A1b	89	84	土師器	SD-05A1d	129	263	土師器	SD-06A0a
10	88	土師器	SD-01G4d	50	143	土師器	SD-05A1d	90	147	土師器	SD-05A1d	130	214	土師器	SD-06A0b
11	104	土師器	SD-01G3c	51	197	土師器	SD-05A0d	91	34	土師器	SD-05A2b	131	264	土師器	SD-06A0a
12	90	土師器	SD-01G4d	52	39	土師器	SD-05A2b	92	11-2	土師器	SD-05A1b	132	163	土師器	SD-06A0b
13	123	土師器	SD-01G3a	53	134	土師器	SD-05A1d	93	1	土師器	SD-05A1b	133	207	土師器	SD-06A0b
14	128	土師器	SD-01H2b	54	21-1	土師器	SD-05A1b	94	5	土師器	SD-05A1b	134	238	土師器	SD-06A0a
15	89	土師器	SD-01G4d	55	308	土師器	SD-05A1d	95	146	土師器	SD-05A1d	135	153	土師器	SD-06Z0a
16	1051	土師器	SD-01G3c	56	20	土師器	SD-05A1b	96	11-1	土師器	SD-05A1a	136	162	土師器	SD-06A0b
17	103	土師器	SD-01G3c	57	22	土師器	SD-05A1b	97	4	土師器	SD-05A1b	137	198	土師器	SD-06A0b
18	1054	土師器	SD-01G3c	58	37	土師器	SD-05A2b	98	189	土師器	SD-06A0d	138	241	土師器	SD-06A0a
19	1053	土師器	SD-01G3c	59	38	土師器	SD-05A2b	99	239	土師器	SD-06A0a	139	296	土師器	SD-06B0a
20	1052	土師器	SD-01G3c	60	67	土師器	SD-05A3d	100	202	土師器	SD-06A0b	140	225	土師器	SD-06A0a
21	121	土師器	SD-01G3a	61	32	土師器	SD-05A2b	101	208	土師器	SD-06A0b	141	233	土師器	SD-06A0a
22	112	土師器	SD-01H3d	62	194	土師器	SD-05A0d	102	177	土師器	SD-06A0b	142	155	土師器	SD-06Z0a
23	117	土師器	SD-01G3c	63	36	土師器	SD-05A2b	103	278	土師器	SD-06B0b	143	243	土師器	SD-06A0a
24	100	土師器	SD-01G2a	64	42	土師器	SD-05A2b	104	206	土師器	SD-06A0b	144	168	土師器	SD-06A0b
25	99	土師器	SD-01G4c	65	29	土師器	SD-05A2b	105	203	土師器	SD-06A0b	145	246	土師器	SD-06A0a
26	109	土師器	SD-01H3d	66	304	土師器	SD-05A1c	106	172	土師器	SD-06A0b	146	161	土師器	SD-06A0b
27	145	土師器	SD-05A1d	67	31	土師器	SD-05A2b	107	262	土師器	SD-06A0a	147	217	土師器	SD-06A0b
28	40	土師器	SD-05A2b	68	136	土師器	SD-05A1d	108	290	土師器	SD-06B0b	148	271	土師器	SD-06B0b
29	35	土師器	SD-05A2b	69	33	土師器	SD-05A2b	109	205	土師器	SD-06A0b	149	181	土師器	SD-06A0d
30	78	土師器	SD-05A1c	70	74	土師器	SD-05A1b	110	255	土師器	SD-06A0a	150	170	土師器	SD-06A0b
31	307	土師器	SD-05A1d	71	57	土師器	SD-05Z3d	111	234	土師器	SD-06A0a	151	190	土師器	SD-06A0b
32	21-2	土師器	SD-05A1b	72	140	土師器	SD-05A1d	112	204	土師器	SD-06A0b	152	175	土師器	SD-06A0b
33	65	土師器	SD-05A3d	73	75	土師器	SD-05A1b	113	210	土師器	SD-06A0b	153	176	土師器	SD-06A0b
34	66	土師器	SD-05A3d	74	53	土師器	SD-05Z3c	114	237	土師器	SD-06A0a	154	184	土師器	SD-06A0d
35	43	土師器	SD-05A3d	75	195	土師器	SD-05A0c	115	235	土師器	SD-06A0a	155	174	土師器	SD-06A0b
36	79	土師器	SD-05A1d	76	196	土師器	SD-05A0c	116	256	土師器	SD-06A0a	156	179	土師器	SD-06A0b
37	41	土師器	SD-05A3d	77	62	土師器	SD-05Z3d	117	199	土師器	SD-06A0b	157	285	土師器	SD-06B0a
38	81	土師器	SD-05A1d	78	69	土師器	SD-05A1b	118	212	土師器	SD-06A0b	158	220	土師器	SD-06A0a
39	82	土師器	SD-05A1d	79	25	土師器	SD-05A2d	119	209	土師器	SD-06A0a	159	274	土師器	SD-06B0b
40	59	土師器	SD-05Z3d	80	70	土師器	SD-05A1b	120	221	土師器	SD-06A0a	160	287	土師器	SD-06B0a

遺物番号	整理番号	器種	出土地点	遺物番号	整理番号	器種	出土地点	遺物番号	整理番号	器種	出土地点	遺物番号	整理番号	器種	出土地点
161	282	土師器	SD-06B0a	201	18	瓦葺	SD-05A1b	241	326	白磁	SD-06C0W	C-1	14	土師	SD-05A1b
162	223	土師器	SD-06A0a	202	305	瓦葺	SD-05A1d	242	182	白磁	SD-06A0d	C-2	344	土師	SD-06
163	284	土師器	SD-06B0a	203	83	瓦葺	SD-05A1d	243	301	青磁	SD-06C0b	C-3	343	土師	SD-06
164	160	土師器	SD-06A0b	204	131	瓦葺	SD-06	244		青磁	SD-06	C-4	142	鑿口	SD-05A1d
165	244	土師器	SD-06A0a	205	63	瓦葺	SD-05Z3d	245	333	青磁	SD-06B0E	C-5	354	平瓦	包含層
166	291	土師器	SD-06B0a	206	10	瓦葺	SD-06A1b	246	336	青磁	SD-06D0b	S-1	355	漆石製品	SD-06B0E
167	249	土師器	SD-06A0a	207	8	瓦葺	SD-06A1b	247	248	青磁	SD-06A0a	S-2	156	漆石製品	SD-01Z0a
168	273	土師器	SD-06B0b	208	2	瓦葺	SD-06A1b	248	226	青磁	SD-06A0a	S-3	356	漆石製品	SD-06C0W
169	259	土師器	SD-06A0a	209	9	瓦葺	SD-06A1b	249	332	青磁	SD-06B0E	S-4	357	漆石製品	SD-06C0W
170	272	土師器	SD-06B0b	210	4	瓦葺	SD-06A1b	250	335	青磁	SD-06C0W	S-5	358	漆石製品	SD-06C0E
171	288	土師器	SD-06B0a	211	3	瓦葺	SD-06A1b	251	331	青磁	SD-06A1b	S-6	359	漆石製品	SD-06C0E
172	230	土師器	SD-06A0a	212	311	瓦葺	SD-06	252	334	青磁	SD-06C0E	S-7	360	漆石製品	SD-06C0E
173	279	土師器	SD-06B0b	213	293	瓦葺	SD-06B0a	253	337	合子	SD-01F4	S-8	361	漆石製品	SD-06D0b
174	283	土師器	SD-06B0a	214	167	瓦葺	SD-06Z0a	254	338	合子	SD-06C0E	S-9	362	漆石製品	SD-06B0E
175	236	土師器	SD-06A0a	215	313	瓦葺	SD-06Z1c	255	339	合子	SD-06C0W	S-10	363	漆石製品	SD-06C0W
176	242	土師器	SD-06A0a	216	312	瓦葺	SD-06	256	342	合子	SD-06A0W	S-11	364	漆石製品	SD-06Z1c
177	231	土師器	SD-06A0a	217	310	瓦葺	SD-06	257	340	陶器	SD-06Z1c	S-12	365	漆石製品	SD-06C0W
178	302	土師器	SD-06C0b	218	347	瓦葺	SD-06	258	341	陶器	SD-06D0b	S-13	366	漆石製品	SD-06C0W
179	260	土師器	SD-06A0a	219	348	瓦葺	SK-02	259	351	陶器	SE-01	S-14	367	漆石製品	SD-06B0E
180	232	土師器	SD-06A0a	220	349	瓦葺	SK-02	260	352	陶器	SX-01	S-15	187	磁石	SD-06A0d
181	245	土師器	SD-06A0a	221	96	白磁	SD-01G4c	261	353	漆土器	包含層	S-16	303	磁石	SD-06
182	228	土師器	SD-06A0a	222	73	白磁	SD-06A1b					S-17	368	磁石	SD-06
183	215	土師器	SD-06A0b	223	350	白磁	SD-06A2a					S-18	369	磁石	SD-06
184	219	土師器	SD-06A0a	224	47	白磁	SD-05A3b								
185	178	土師器	SD-06A0b	225	180	白磁	SD-06A0d								
186	187	土師器	SD-06A0e	226	328	白磁	SD-06C0W								
187	185	土師器	SD-06A0d	227	327	白磁	SD-06C0E								
188	258	土師器	SD-06A0a	228	320	白磁	SD-06B0E								
189	192	土師器	SD-06A0b	229	329	白磁	SD-06D0b								
190	191	土師器	SD-06A0b	230	317	白磁	SD-06Z1c								
191	265	土師器	SD-06B0b	231	125	白磁	SD-01J2b								
192	257	土師器	SD-06A0a	232	322	白磁	SD-06B0W								
193	345	瓦葺	SD-01G6a	233	325	白磁	SD-06C0W								
194	346	瓦葺	SD-01G6a	234	323	白磁	SD-06B0W								
195	309	瓦葺	SD-03E1d	235	319	白磁	SD-06A0W								
196	71	瓦葺	SD-06A1b	236	330	白磁	SD-06								
197	60	瓦葺	SD-05Z3d	237	318	白磁	SD-06A0E								
198	16	瓦葺	SD-05A1b	238	324	白磁	SD-06C0E								
199	51	瓦葺	SD-05A4d	239	316	白磁	SD-06Z1c								
200	133	瓦葺	SD-05A1d	240	321	白磁	SD-06B0E								

HOKUTOYUUI

10m

XY: 1~309

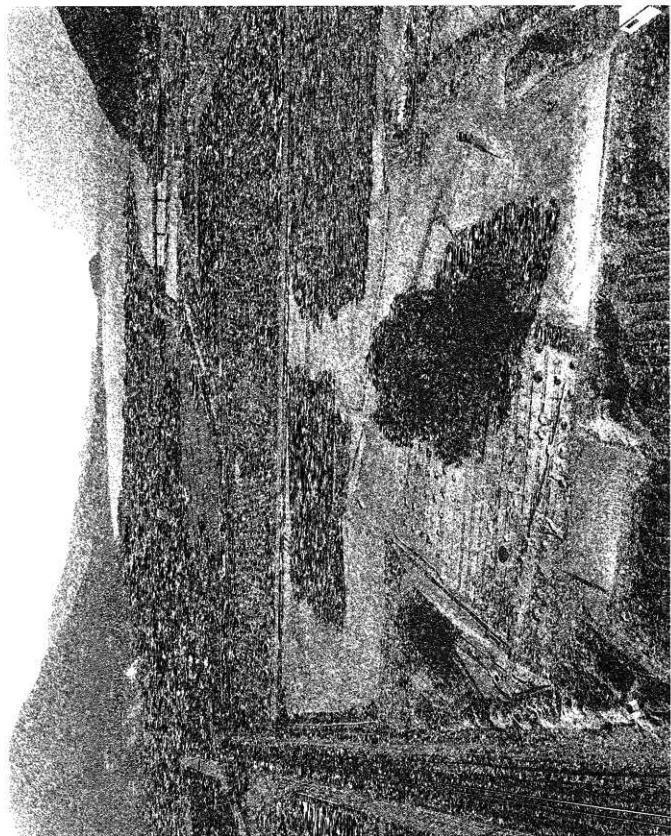
a: NW

b: NE

c: SW

d: SE

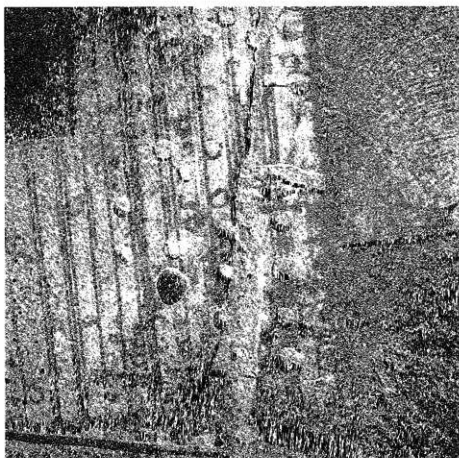
图 版



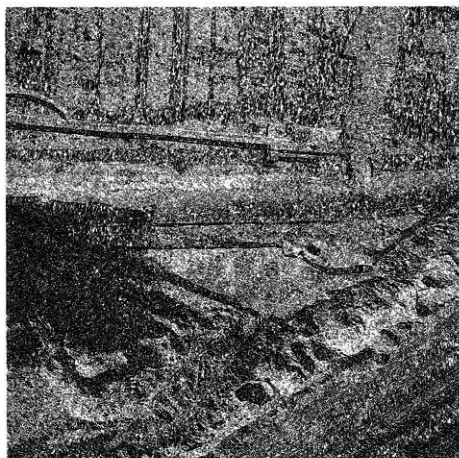
道城上空から南東方面を望む（空中写真）



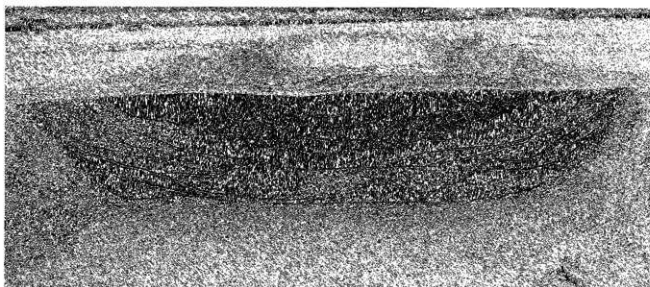
木舟の森遺跡全景（空中写真）



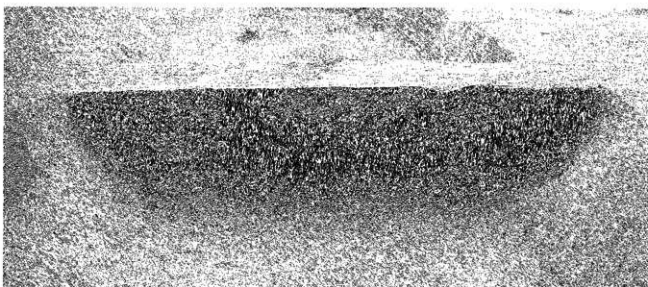
1. S D -03, 05切り合い部分 (空中写真)



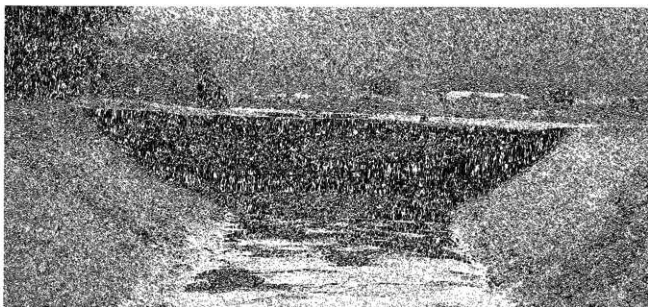
2. S D -05, 06切り合い部分 (空中写真)



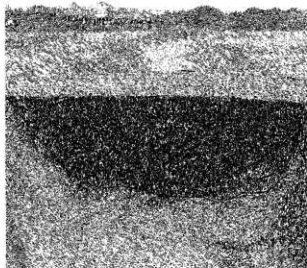
1. SD-01-a 七層断面 (東から)



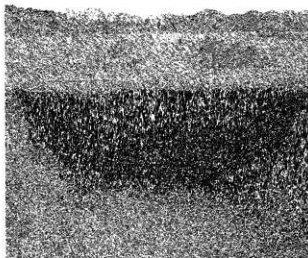
2. SD-01-b 七層断面 (北から)



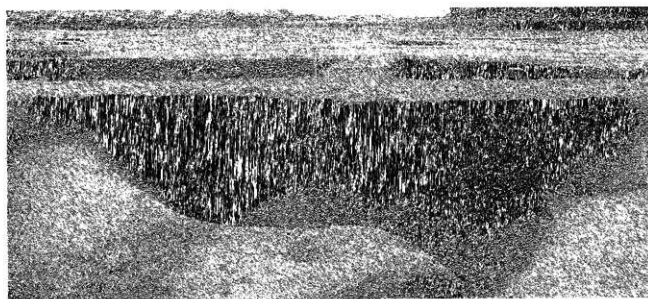
3. SD-01 d 七層断面 (北から)



1. S D-03土層断面 (東から)



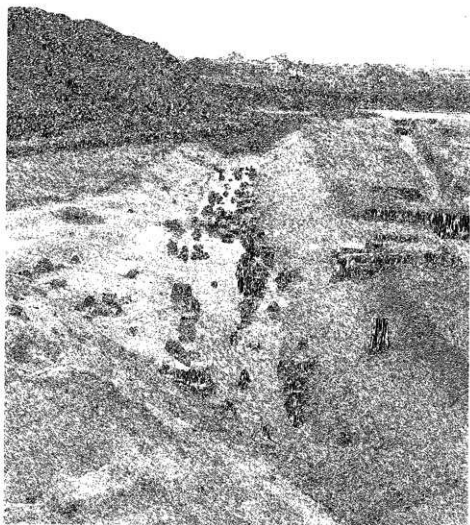
2. S D-04土層断面 (東から)



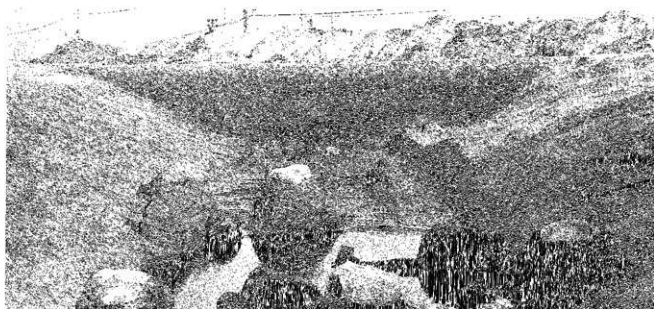
3. S D-05北边上層断面 (東から)



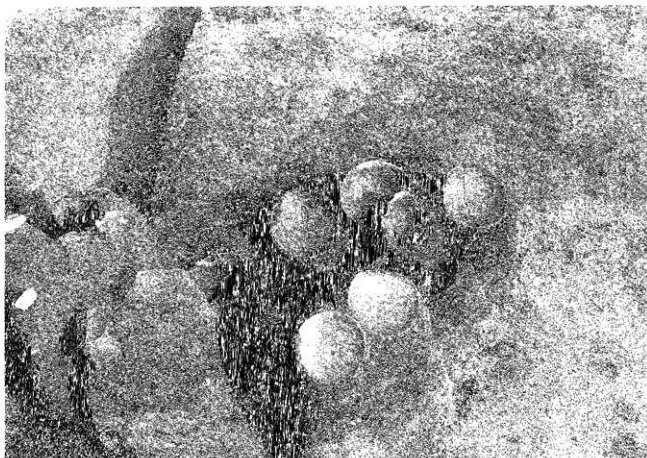
4. S D-05西边上層断面 (南から)



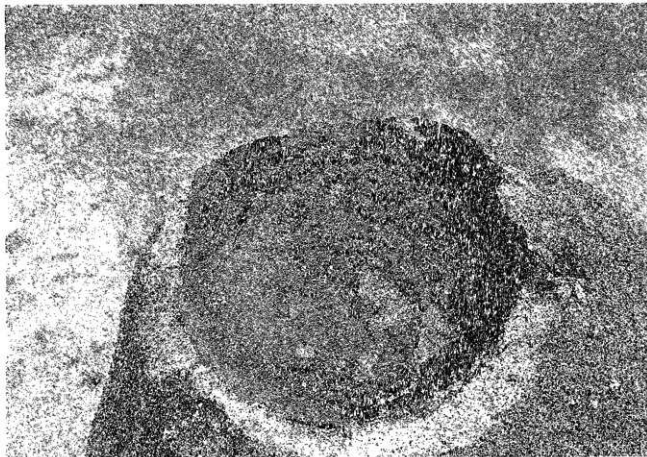
1. S D-06全景(東から)



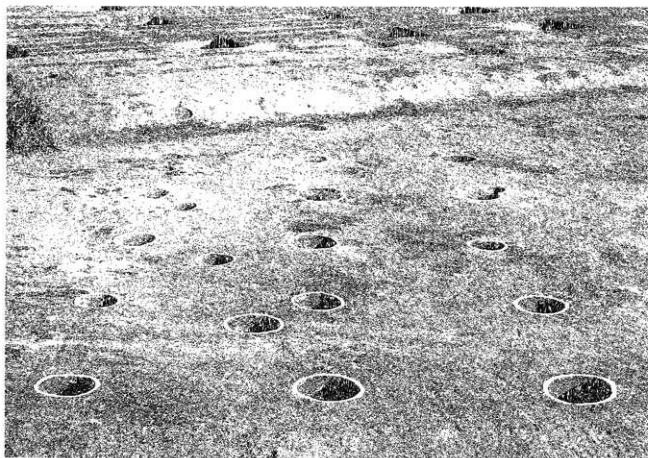
2. S D-06土層断面(西から)



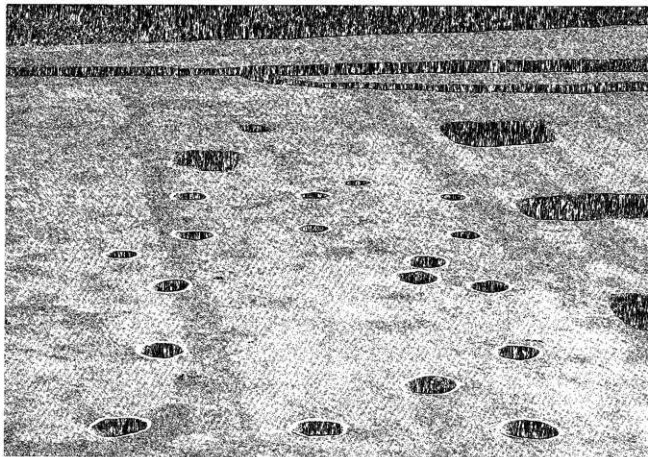
1. S.D.-05遺物出土状況（東から）



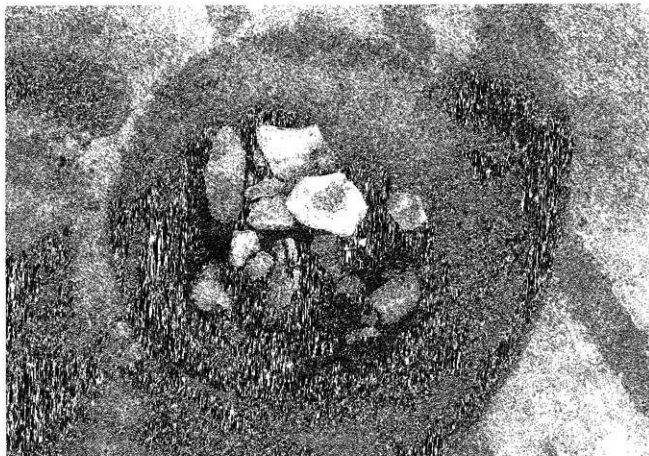
2. S.D.-05遺物出土状況（西から）



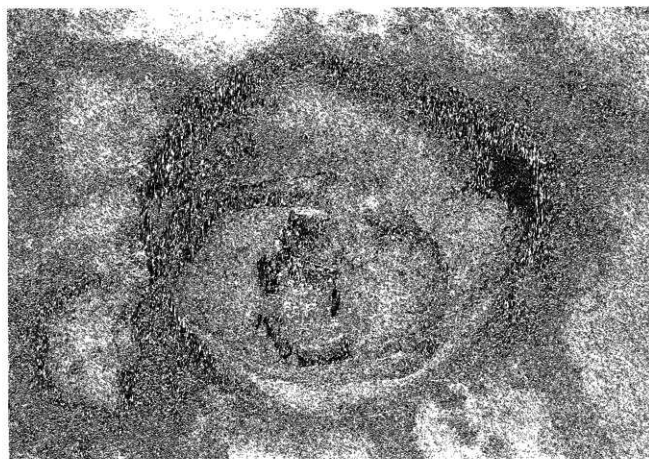
1. S B - 01 (東から)



2. S B - 02 (北から)



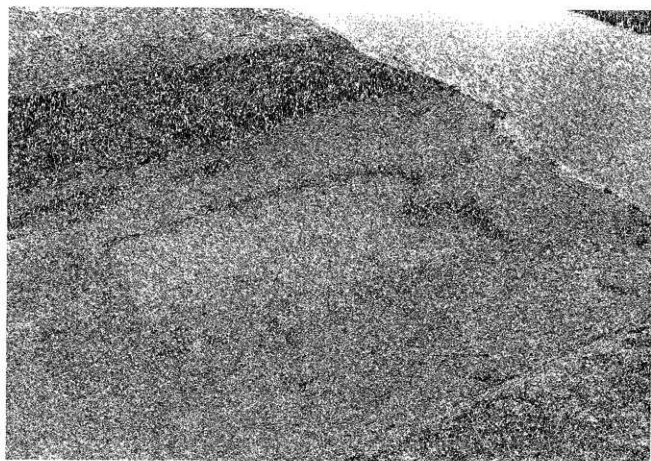
1. SE-01 検出状況 (南から)



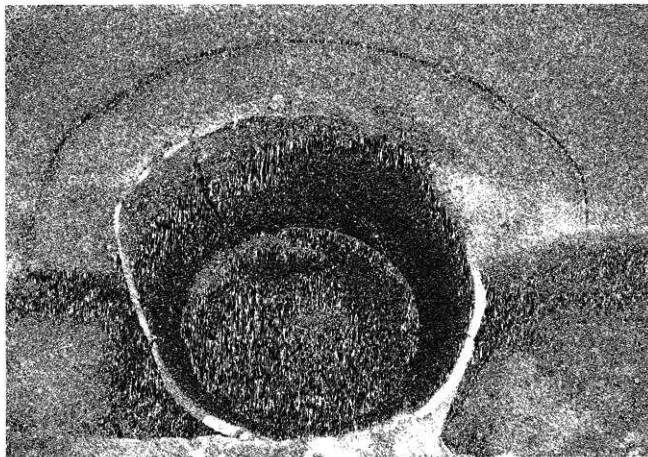
2. SE-01 (南から)



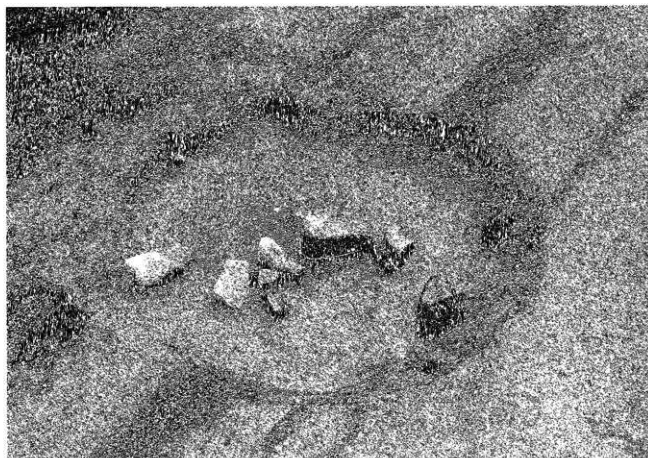
1. SK-01, 02検出状況 (東から)



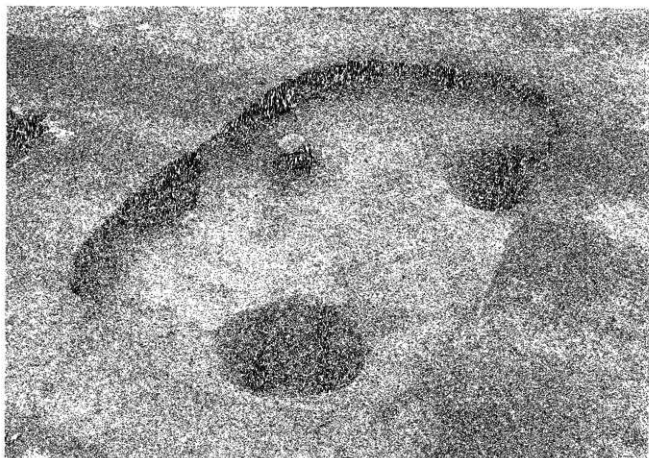
2. SK-01完掘状況 (北から)



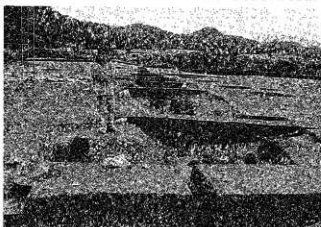
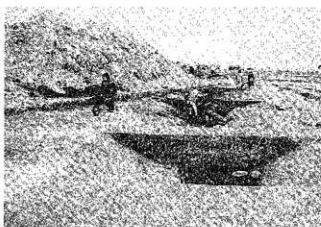
1. SX-01 (南から)



2. SX-02 (南から)



1. SX-03 (東から)



2. 調査風景



1



2



3



5



6



7



8



9



12



14



16



17



18



19



20



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72



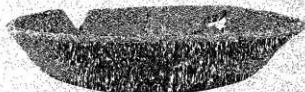
73



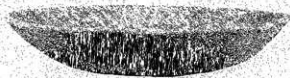
74



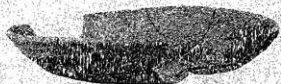
75



76



78



79



80



81



82



83



84



85



87



88



89



90



92



93



94



95



96



97

S D - 05 出土陶器 · 6



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109

S D - 06 出土陶器 · 1



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123



124



125



125



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



156



157



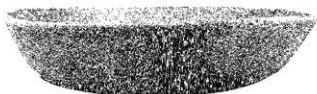
158



159



160



161



162



163



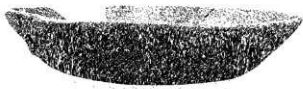
164



165



166



167



168



169



170



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183



184



185



186



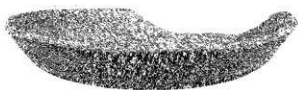
187



188



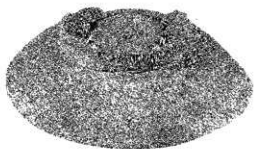
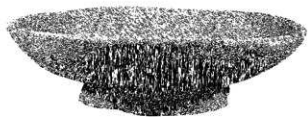
189



190

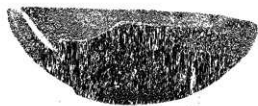
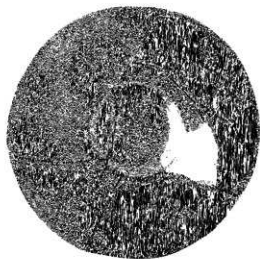
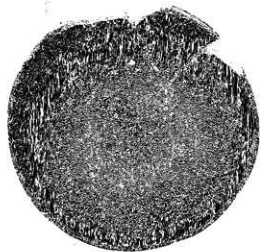


191

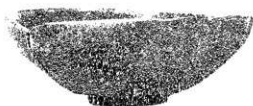


192

S D - 06 出土陶器 - 7



193



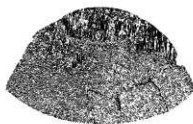
194

S D - 01 出土瓦器碗

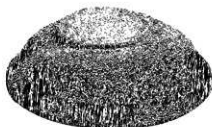


S D - 03出土瓦器枕

195



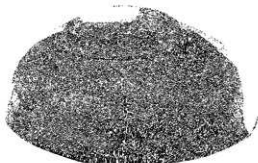
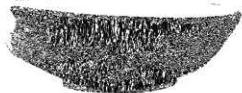
196



197

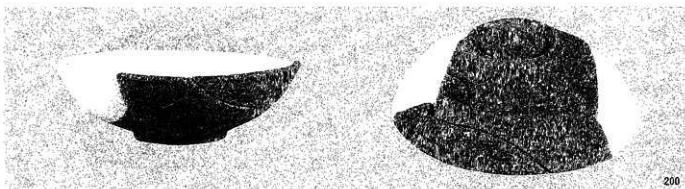


198



199

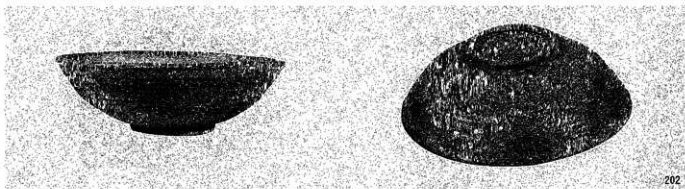
S D - 05出土瓦器枕 · 1



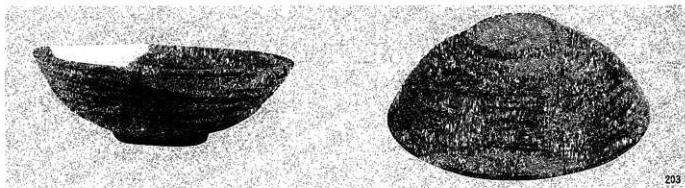
200



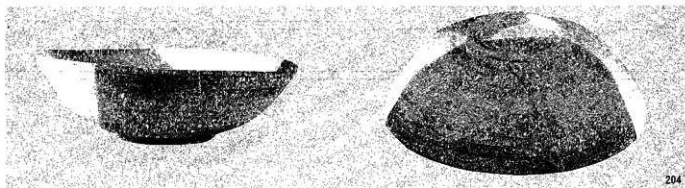
201



202



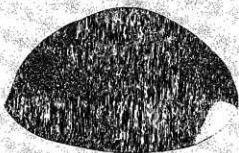
203



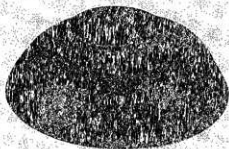
204



205



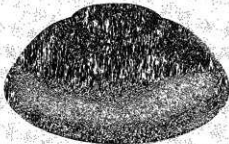
206



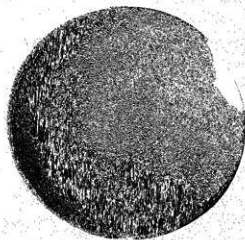
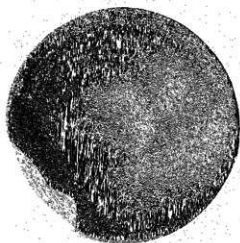
207



208



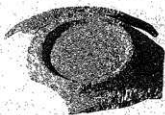
209



210

211

SD-05出土瓦器残·4



212

214



213

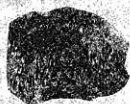
SD-06出土瓦器残·1



215

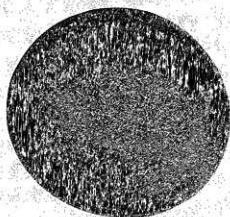


216



217

S D・06出土瓦器輪・2



218



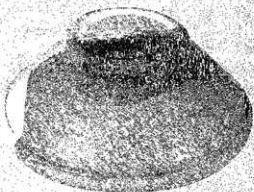
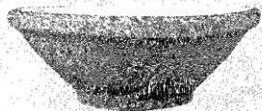
219



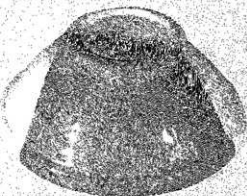
220



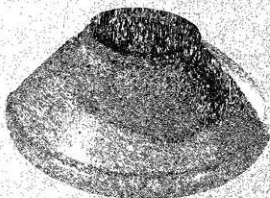
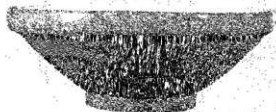
S K・02出土瓦器輪



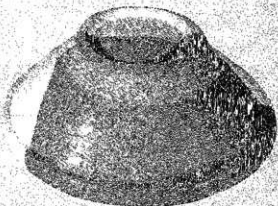
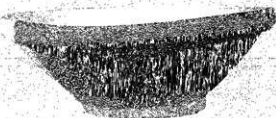
221



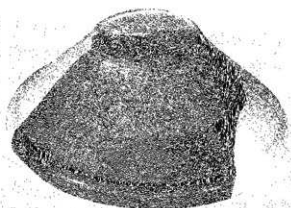
222



223



224



225



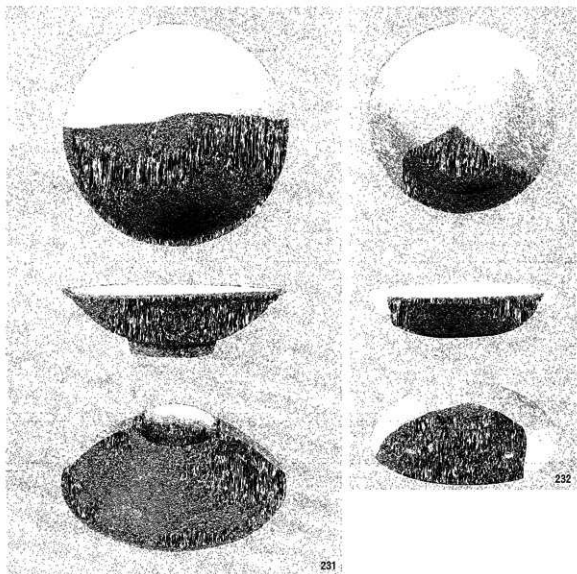
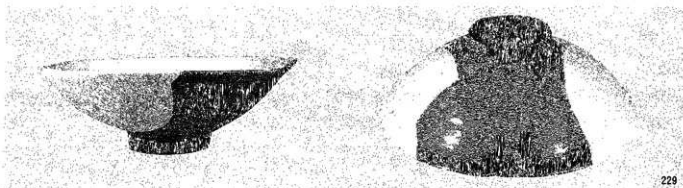
226

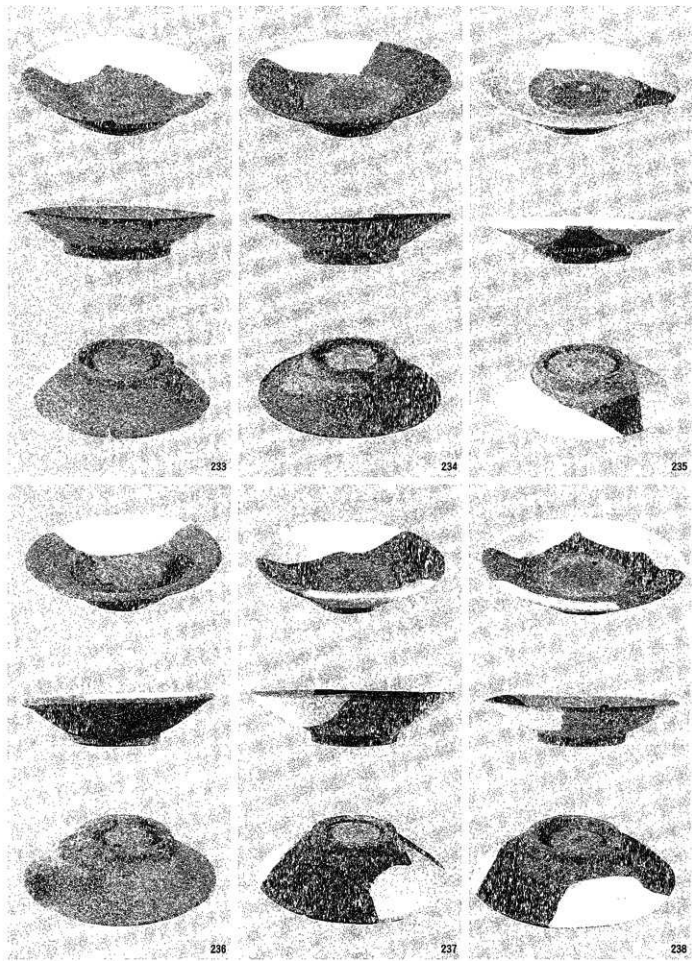


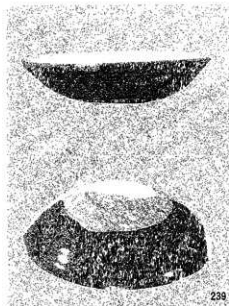
227



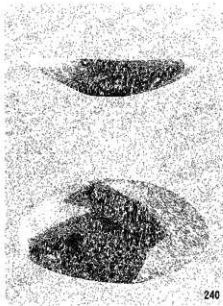
228



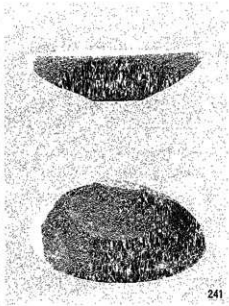




239



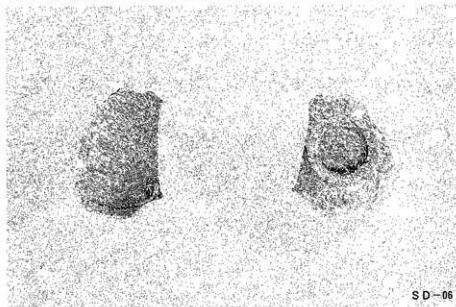
240



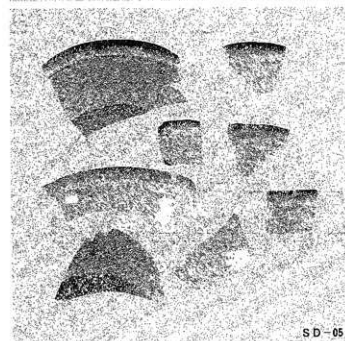
241



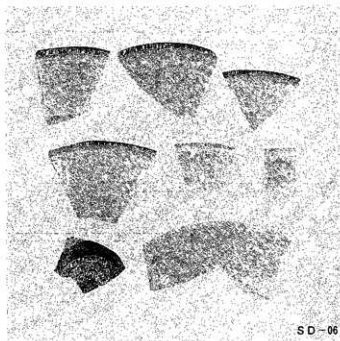
242



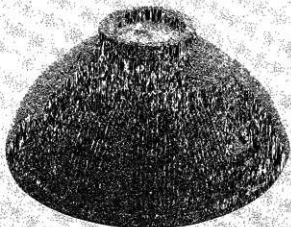
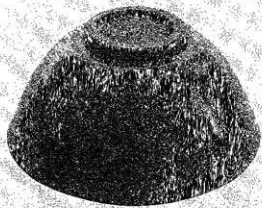
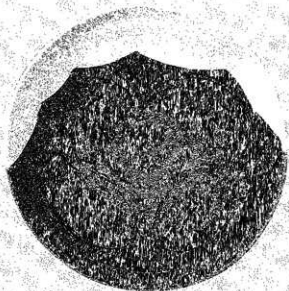
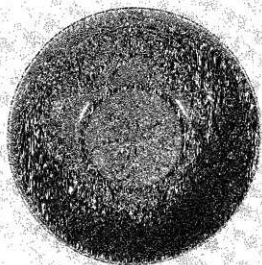
SD-06



SD-05



SD-06



243

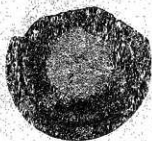
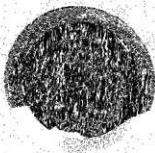
244



245



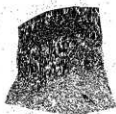
246



247

248

251



249



250



252



SD-06



SD-06



SD-06

出土青磁・3



253



254



255



256

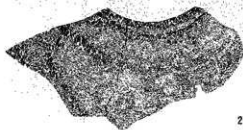
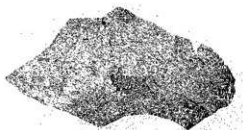
出土合子



257



258



259



260



SD-06

出土陶器



261



C-1



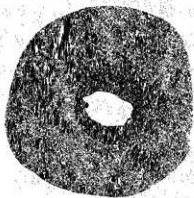
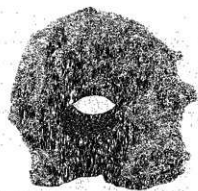
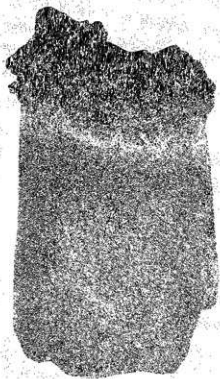
C-2



C-3

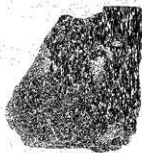


C-5

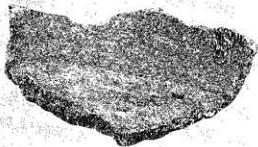


C-4

出土土製品・2

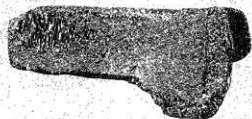
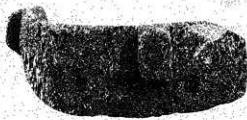


S-1



S-2

出土石製品・1



S-4



S-3



S-5



S-6



S-15



S-16



S-17



S-18



S-7



S-8



S-7



S-8



S-9



S-10



S-11



S-9



S-10



S-11



S-12



S-13



S-14



S-12



S-13



S-14

報告書抄録

ふりがな	きぶねのもり いせき
書名	木舟の森遺跡
副書名	深江地区は場整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	Ⅱ
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 12 集
編著者名	村上 敦
編集機関	二丈町教育委員会
所在地	〒819-16 福岡県糸島郡二丈町大字深江1071 TEL(092)325-1111
発行年月日	1995年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
木舟の森	福岡県 糸島郡 二丈町 大字深江 字木舟	40462	—	33° 31′ 04″	130° 08′ 52″	19920916 { 19930115	7,000㎡	は場整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木舟の森	館跡	平安時代 (12世紀)	溝状遺構 掘立柱建物跡 井戸	土師器・瓦器・ 輸入陶磁器・ 漆器・石鍋等	12世紀における 交易拠点の可能性

木舟の森遺跡

二丈町文化財調査報告

第12集

平成7年3月31日

発行 二丈町教育委員会
福岡県糸島郡二丈町大字深江1071番地

印刷 株式会社西日本新聞印刷

